

911.3

八

頁



解州夏月歌兼長秋目錄

夏之上

四月初	介月	夏秋二	麥拔四
旅	白至六	夏秋	麥也
夏盡	龍至七	夏秋七	龍末
子園子	龍化	花摘八	花開
年鄰端	夏終	夏秋九	夏書
夏節	夏終	黃酒	古至
風柳	夏三	龍十	松魚
夏秋十	龍至十二	夏風	牡丹十三
為藥十五	燕子花十六	花黃十八	玉卷菊

玉卷芭蕉十九

紫羅傘イナハツ

嬰粟二十

芭蕉廿二

豆花

凡車

石蓀

茨花

躑躅花

美人草

菜花

印花廿三

卯花腐苗

若楓

若菜

藤菜廿七

枕若菜

若菜花

若菜

菜櫻

實椽

木子茂廿八

木下周

常盤木廿九

竹落系

桐花

柚花廿九

泰山林

根穀花

枳花

繡球花

白丁花卅

藪桂

檉桐花

花茄子

狗茄子

茄子

荷卅一

倭子卅二

藤

薔

郭公卅三

管者卅四

老管卅五

カニコトリ  
鷹鳩卅三

鶺鴒卅五

キヤウク  
割草卅六

ヨシキリ  
葭刺卅六

鷹入鳩

養鸞

枝桂卅七

養

香楠

牝刺卅八

子子

氷馬卅九

飛糞

虱卅八

鴨牛卅九

蚰蜒卅九

蛇衣卅九

虱

鴨

蚰

夏々中

五月卅一

若蒲

若蒲賣卅二

軒若蒲

若蒲卅三

若蒲湯

若蒲刀

若蒲抄

菜玉

平地抄

百株鏡

粽

拍餅卅四

熾

割拭卅五

菜子摘

菜日

加茂藪馬

竹餅卅六

花若蒲

題叢自録

石菖蒲

花旦見

芙蓉

蓮卷紫

蓮浮葉五十七

蓮五十八

藻花

萍五十九

紫葳六十

苔花

百合六一

紅藍花六十二

忘子

萱草

下毛花

金銀花

夏菊

紫陽花

瞿麥六十三

常夏六十四

石竹

珊瑚子

馬齒莧六十五

酸漿六十五

薔薇六十六

芍藥

藜

何計菜

苦菜六十七

十葉花

一葉

覆盆子

柴胡

葉實

藤實

青梅

南天六十八

粟花

檉花

牡籬花

合歡花

柝花六十九

花柝榴

花榴

檉七十

山梔子

交木七一

若柳七十二

今年七十三

竹皮散

瓜花

胡瓜七十一

天瓜花

早松茸

早苗

田植七十二

田植七十三

麦田

田取七十四

子乙女

採物七十五

蜂七十五

牧七十七

牧七十九

故遺火

故遺八十

蜜八一

腐八十二

蠟

交蜂

協子

蠟虎八十三

蠟

備備八十五

水八十六

水八十七

鴉川八十九

鴉九十一

翡翠

羽九十二

鴨子九十二

輕九十三

麻九十四

麻子

交麻九十三

照射

火串

于九十五

題辭目錄

小絲

海老氣ホヤ

有無日

日月曇

日月雲

日月雨九十五

梅雨

梅雨晴九十八

日月濁

日月晴

虎雨

短夜九十九

夕毒夜百

夏夜百

夏月百

故帳百五

紙帳百六

帷子百

过夜

夏服百

薄物百八

晒布

夏之下

六月百九

水立百

水室

夏水百十

水餅

一灰酒

祇園會

嘉定百十一

坐頭納涼

富士詣

鞍馬竹伐

中夏生

去用

虫干

夏日百十三

暑百十三

夏天百四

日盛

夕立百十五

夏雨百十六

夏露

旱

雨乞

雲降百十七

扇百十八

團扇百九

汗百十

汗拭

拭衣

日傘

簞

竹婦人百廿一

竹奴

抱笥

笥枕

涼百廿二

納涼百廿五

風蓑百廿七

打水

清水百廿八

晒井百廿九

麻地酒百卅

心立

暑水

冷瓜

送妙寺

冷汁

水粉

水飯

冷湯百卅一

干飯

梅干

秀需教

菽植

漆取

枇杷

揚梅

李

林檎

百日紅

菱柳 カウホ子

夏柳 百廿二

凌霄花

慈姑 オモタカ

河岸

甘麦花

蓴菜

海松

荷花

夏草 百廿三

喜芭

忍冬

勞春羅 カシ

釣鐘草

鸚草

凡菊

玉花 キボウシ

鴨足草 百廿四

荷花

射干

紫薔薇

喜鬼灯

赤菜

麻

藍川 百廿五

锦花

菊花

交菜

穀子花 百廿六

夕顔 百廿七

喜瓜 百廿九

紅夏

新小麦

小麦草

瓜

淺瓜

甜瓜 メウハ

南瓜

鷹爪草 百廿

趨鶴 ニホリ

夏菜

雲

怪 百廿

物

志出

紙魚

金龜虫 百廿

鮎

川將

小雞

結釣

海月丸

仲慈

系

夏神木 百廿三

日折使

序菰

川社 百廿四

秋代

茅菰

互麻

交瘦

交雲 百廿五

交心

交水

交川 百廿六

交海

交水

秋込

晚交 百廿七

情交

晚交 百廿八

交整



臥中染てこの根をこぼれ  
 直ひつ持て机の口りか  
 市つくと小川をこぼれに  
 梳人ももも想ひの口りか  
 くれくと抱にたると口りか  
 心えの志と口りか茶はそり  
 吹うりん吹い口りかこりか  
 明このほのくこりか口りか  
 木のきれけも落さね口りか  
 白濁てれりかこりか  
 くらりれれにりりか

岳 駿  
 葵 亭  
 菊 也  
 号 笠  
 漫 々  
 維 啄  
 我 少  
 公 路  
 休 祥  
 希 言  
 有 籃

又 礼

名もさしにふさより其まの  
 梅檀の存のりりりりりり  
 弁りりりりりりりりりり  
 弁りりりりりりりりりり  
 所晴りりりりりりりりり  
 号をさよとにがく弁りりり  
 られりりりりりりりりり  
 流りりりりりりりりりり  
 瘦腸の毛に激凡りりりり  
 栲ひりりりりりりりりり  
 赤きりりりりりりりりり

足 直  
 暮 三  
 冥 二  
 爽 和  
 長 高  
 梅 岑  
 宗 瑞  
 善 木  
 公  
 菟 左  
 栲 左



又礼や舊ハ延ウ 隆ウハ白シ  
 大名此ニ之ヲテコリ又礼  
 又礼リハ身ヲ死スルヲ佩ル  
 酒吞の穢屋ニシテ礼  
 礼ニシテハ狗ノ身ヲ死スル  
 病人の身ヲ死スル  
 又礼協のキキルヲコリ  
 古礼とチカ毎に持テ又礼  
 リの礼ハ淋ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 風ニシテハ禮ハ礼ハ礼ハ  
 心王下ニシテハ礼ハ礼ハ

公 百 曉 公 白 几 洪 白 斗 必 吉  
 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公

又礼禮ト如礼多礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 老礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 大ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ  
 礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ礼ハ

松 士 植 升 拱 肩 成 公 洪 可 公  
 兄 勃 不 六 六 六 六 六 六 六 六

ねとんぬの煮い守味りし文礼  
花久根つらねねそまのころね  
人中に旭てんうり文礼  
方に保ねうち淋淋文礼  
旅人いさくすんがし花り人  
妻や弟ふまねおするし松の葉  
志しけん旭のうりや文礼  
ついに松の持てこりし人  
花うてふさしにり杜る  
吃くと文おんり文礼  
花よりひきり先に文礼

大阜  
乙二  
今  
岳輪  
道彦  
月尾  
養比  
祥木  
垂彦  
魯隱  
空旋

花うていてそり人を喜れり  
更花何やうそめ志のほり  
白芥子と乾うそ文礼  
人りしと久もろり言花  
吉さるるんや花り人  
昔のまのほりりと結り文礼  
わがうて杜母咲り花神し  
松の世のうりそ文礼  
り灯を土より移りし文礼  
花うて女子にふりそ文礼  
考のそれまにほりそ文礼

伊  
備  
吾石  
葵亭  
考笠  
一茶  
菊也  
三休人  
似藤  
世竹  
春耕  
左文  
有吾





筑戸祭

十日之十日の夕にわが若き屋  
麦と若き川にや若き屋  
若き川にや若き屋に若き川  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋

若き川  
道若  
一若  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中

筑戸祭

小のりや筑戸の若き屋の尾  
古湯といはれて若き屋の尾  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋  
若き屋に若き屋に若き屋

若き屋  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中  
若中

筑戸祭

人よむと旅米此場の若き屋

若中

千園子  
灌佛

ほろおんくさむらうけり園子  
灌佛や二本の坊さるや  
産湯をけし仙にや  
灌佛やけりさるる柳陰  
ちるさるる中けり  
さのあかきふりさるる仙  
灌佛やけりさるる木原  
灌佛のたがやけりさるる  
筆と一度にそたつ  
天巻さるる甘が仙の産湯  
肌脱てさるる世や

法  
無醉  
園更  
葵  
白旗  
今  
在  
松  
完  
成

花  
摘  
花  
堂

花堂人しんさるる  
灌佛や又の生るる  
多くて仙の生るる  
松風のよみ吹や仙  
灌佛や世の向ふと  
灌佛やけりさるる  
木とさるるして生るる  
灌佛やけりさるる  
花堂やけりさるる  
君り代やけりさるる  
花堂の向うさるる

道  
蕉  
松  
在  
完  
成

題兼表

竿擲燭

花は虫を食つたさうに  
 地獄のよのこねてふは虫  
 そこそねしこと波女は虫  
 腕はちやねたかじふは虫  
 鳥は虫にたれぬ竿たじふ  
 八の花今残さてしはれ  
 交は露の人のさる人  
 交は露の人のさる人の教  
 交は露下忘て塊は怒  
 打りやあははるしのふ  
 交は露や人の呉たる人の

曉甚  
 有明  
 左明  
 按虫  
 合波  
 竿雁  
 白旗  
 年ん  
 宜麦  
 吳衣  
 至長

夏 籟

交 花

交 書

清くは花はよひる交ふか  
 二節交ふさうとてゆ引と  
 久遠や駕の小蛇の交花持  
 葉の物しがる交ふり  
 交百口曇もゆわぬ  
 りをそつてさふる葉の交ふか  
 志のよ字息に葉つく交ふか  
 いなりはうりたりたる交ふか  
 花をたると交ふの机  
 交ふとん強うさ春の葉  
 うが人の交ふはるは硯水

白旗  
 乙一  
 一葉  
 護物  
 号打  
 人  
 几葉  
 大江丸  
 祐男  
 乙二  
 長高

夏 新

交 行

古 榮 酒

凡 杵

まきし

船島にまきしをくれたる交古か

筆の戸十一交の筆の控 予

その中に屋棟いづれ交新か

交古まきし必人をまきしる

鉄炮も訓てハ咲一交百日

酒賣るや杵れらるる花煙の

机脱て古榮撥出は壺の底

古榮の久人にもつらん世

凡杵もあすしきまきしをたし

まきしハたぬまきし立凡杵茶も

一 榮

榮 亭

梅 此

重 原

久 風

田 北

京 師

石 川

丈 左

梅 尾

節

筆しはまきし句下りか

はまきしし骨と旦の杵の壁

凄くもわ石の枕下一杵 杵

いけれとまをいれん杵の版

蕨に家まきしを七 杵一杵

杵下りて造村とまきし身か

流世杵語れハまきし去絶に

杵るれよ杵をまきしへてまきし

版杵や母を皺まの工に力れ

杵の力も杵まのくまきし

中 佐 貞 佐 宗 瑞 蕨 太 今 保 吉 沙 屋 乙 二 篤 老 尼 美 九

題 兼 長



松 魚

弥志女一以先也河の音  
 活(奉る)末に上之 初松魚  
 扱の子北家(人)と初松魚  
 地を走る女と(初)松魚 夫  
 女(母)と(偽)りし 初松魚  
 魚白の妻(子)有十 初松魚  
 糸(子)後(に)死(れ)初松魚  
 白子(子)松魚(者)後(の)節  
 女(子)不(信)妻(の)子 初松魚  
 初松魚(不)没(者)の(子)取(感)  
 玉(明)の(子)不(子)初松魚

廿成 去 涯  
 子 解  
 覽 甚  
 会 三  
 白 旋  
 夢 右  
 会 今  
 百 眩  
 保 吉  
 以 是  
 恒 九

非

麦 林

子の平(子)の(妻)子 初松魚  
 白子の(子)松魚(子)松魚(子)  
 子(子)解(子)松魚(子)初松魚  
 松(子)瓜(子)松魚(子)初松魚  
 初松魚(子)松魚(子)松魚(子)  
 子(子)有(子)松魚(子)松魚(子)  
 松(子)松魚(子)松魚(子)松魚(子)  
 松(子)松魚(子)松魚(子)松魚(子)  
 松(子)松魚(子)松魚(子)松魚(子)  
 松(子)松魚(子)松魚(子)松魚(子)  
 松(子)松魚(子)松魚(子)松魚(子)

擗 世  
 五 旋  
 一 子  
 道 走  
 去 郷  
 一 条  
 学 堂  
 且 一  
 子 人  
 洞 一  
 障 一

非

飯詰む狐道よりや麦の穂  
病人の呼吸も過り麦の穂  
族舞し（き）や麦より秋の暮  
乞食の心せはあて尺録 麦  
方周の窟中より危麦の穂  
麦穂や赤くもなりお  
麦畑や埃の中と産 尺取  
麦畑の赤くも似りや霞巻は露  
麦刈りの袖や袂も麦の穂  
麦畑や掃に人りひし 尺  
田を捨て後に麦刈の 尺取

青 白  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公

穂 麦  
青 嵐

麦の穂をいひつり小畑の  
麦畑やあはれの花の尻たき  
挿れ木もよみよや麦の穂  
穂麦のたねをいひ麦の穂  
穂をいひつりの穂や麦の穂  
麦秋をいひつるや中原巻麦  
麦の穂を春の穂に産にか  
穂をいひつりの穂や麦の穂  
荒畑やいりうらやけき嵐  
心通や天巻拾ふ麦ありし  
いりうらやけき嵐

青 白  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公  
公 公

題 巻 八

去氣能二在氣一能二水  
 弓持の能二在氣一能二水  
 去氣能二在氣一能二水  
 中の能二在氣一能二水  
 砂村下去の能二在氣一能二水  
 用の能二在氣一能二水  
 主の能二在氣一能二水  
 此の能二在氣一能二水  
 去氣能二在氣一能二水  
 筋道下小村下去の能二在氣一能二水  
 周の能二在氣一能二水

保吉  
 百明  
 素二  
 立胡  
 恒九  
 寺大  
 大亭  
 道彦  
 今  
 甚堂  
 秀冠

壯丹

去氣能二在氣一能二水  
 去氣能二在氣一能二水  
 情並下去の能二在氣一能二水  
 花の能二在氣一能二水  
 有の能二在氣一能二水  
 葉の能二在氣一能二水  
 壯の能二在氣一能二水  
 壯の能二在氣一能二水  
 壯の能二在氣一能二水  
 壯の能二在氣一能二水  
 壯の能二在氣一能二水  
 壯の能二在氣一能二水

能  
 能  
 能  
 能  
 能  
 能  
 能  
 能  
 能  
 能  
 能

公 松 足  
 希 言  
 祓 呂  
 士 切  
 遲 力  
 本 僊  
 葉 兆  
 飛 文  
 成 炎  
 一 醒

公  
 松  
 足  
 希  
 言  
 祓  
 呂  
 士  
 切  
 遲  
 力  
 本  
 僊  
 葉  
 兆  
 飛  
 文  
 成  
 炎  
 一  
 醒

公 芳 成  
 松 嶺  
 足 嶺  
 希 嶺  
 言 嶺  
 祓 嶺  
 呂 嶺  
 士 嶺  
 切 嶺  
 遲 嶺  
 力 嶺  
 本 嶺  
 僊 嶺  
 葉 嶺  
 兆 嶺  
 飛 嶺  
 文 嶺  
 成 嶺  
 炎 嶺  
 一 嶺  
 醒 嶺

公  
 松  
 足  
 希  
 言  
 祓  
 呂  
 士  
 切  
 遲  
 力  
 本  
 僊  
 葉  
 兆  
 飛  
 文  
 成  
 炎  
 一  
 醒

横町の地車新く牡子あ  
 不つらうと名ぬ牡子の名を  
 海山のくしを名ぬ牡子あ  
 一輪の牡子終り花にたり  
 かつくも又毎日の片らん  
 志つそを人けあつて牡子あ  
 草家版の用くし牡子あ  
 花地て名る志つて牡子  
 牡子さうと名てその系を  
 名枝を押つて咲にらん  
 貴れそわそわ牡子のふは

共堂  
 養以  
 秀剛  
 慈白  
 電権  
 葵亭  
 雪堂  
 共高  
 陸奥  
 麦洲  
 菊也  
 彦人

向牡子咲て十をりとれ  
 何人の孫々より片らん  
 牡子ありと人けあつて  
 ちる花のこしをたす牡子あ  
 向牡子風を抱て名れり  
 乾りまけやれ牡子に名れし  
 碎されて蝶のこえら牡子あ  
 石ころとれも名つて牡子あ  
 赤やのふより向き牡子あ  
 牡子咲て依れ名を起し  
 又ともるや向き牡子の表は

志宇  
 秋史  
 卓池  
 乘紀  
 碩布  
 星銘  
 居然  
 尾出  
 五老  
 青頂  
 松呂  
 丙子

題表夏

為 菜

たるおれてまはしけりまはしけり  
 蝶ももふの法より牡子畑  
 菜むふふをけりしに牡子畑  
 牡子畑と覚てまはすむの氣  
 白牡子畑の法の後此日  
 賭して基にまはしたる牡子畑  
 白のりを大にまはす牡子畑  
 花といふ牡子畑ある久し  
 いふれへ牡子畑たふれぬ  
 為菜に其の歌はるりりり  
 為菜に細戸つるる 唐久風

万波 露井  
 尾張 三糸  
 駿河 画牛  
 其松 桃序  
 伊豫 其松  
 丹波 菜隠  
 越前 瑞新  
 左衛門 左衛門  
 日向 向旋  
 官 官父

燕 子 花

又六代為菜つるる心かか  
 為菜や終りに終るるりり家  
 為菜にたのしきう花久風  
 為菜やけりし中道の小さうり  
 為菜や牙持るるに此鳥鴨子持  
 為菜はいりぬるまも笑たる尾  
 為菜とらん中道あり牡子畑  
 けりし下道く一花く牡子畑  
 人々の原をさうしるるる  
 牡子畑をさうして笑たるり  
 飯初に足てさうし牡子畑

七切 道光  
 左衛門 左衛門  
 尾張 栗叟  
 尚心 柳居  
 曉菴 莫老  
 今 梅元

白根人主もさやまのり  
 宗澄此交れさるる杜若  
 とさるるのさるるのさや杜若  
 杜若折んと折ると花を  
 身す一毛もさるるさるる  
 杜若やさささるるのりさるる  
 朝風やた今さるる杜若  
 杜若是もさるるや甲一枚  
 りさるるにいつさるる杜若  
 杜若あさるるさるるさるる  
 杜若白くさるる世もさるる

白根  
 保吉  
 去藤  
 希言  
 拱道  
 存亞  
 恒丸  
 寒崖  
 成炎  
 蔭笠  
 三顧

朝のりハ破も脱一杜若  
 恒丸をさるるさるる杜若  
 人片のうさるるさるる杜若  
 さるる折ていさるる杜若  
 掌のさるるのさるるさるる  
 さるるや又もさるる杜若  
 短衣の花ハさるる杜若  
 投入てさるるをさるる杜若  
 人についてさるる杜若  
 杜若さるるハ人ハさるる  
 生ハ白けてさるるの杜若

甘谷  
 可親王  
 一子  
 道虎  
 今  
 葵亭  
 養礼  
 魯隱  
 聖権  
 権例  
 長為

題叢最













美人花  
 花  
 美人  
 花  
 美人  
 花

矣之も仕謀下へんて花の花  
 卯の花にむかしはくも前の子  
 うつらひにぬかすもすれ花  
 龍噴きうきにひつて花の  
 花中やそれとまじつて花  
 葉のつに垣をさそり美人  
 蝶くもまじり葉の美人  
 くれくもまじり葉の美人  
 卯の花に中や葉の葉  
 卯の花下葉をさそり花  
 卯の花下葉をさそり花

戸  
 對  
 共  
 可  
 雨  
 曉  
 白  
 公

卯の花の葉ハまき又まき  
 卯の花にむかしはくも前の子  
 うつらひにぬかすもすれ花  
 龍噴きうきにひつて花の  
 花中やそれとまじつて花  
 葉のつに垣をさそり美人  
 蝶くもまじり葉の美人  
 くれくもまじり葉の美人  
 卯の花に中や葉の葉  
 卯の花下葉をさそり花  
 卯の花下葉をさそり花

在  
 恒  
 士  
 栲  
 葉  
 成  
 完  
 祥  
 可  
 公  
 一





其ゆるて豆腐下やうな感じ  
塔之木よりうらむるをよか  
ふはくと音階なるをよか  
柴火戸の静く志あるをよか  
とうくと静の底にをよか  
戸に立て小る来て鳴るをよか  
附やう先へ来て居るをよか  
多しつらなるをよか  
傘のこらぬるをよか  
そらくと音をたけし老木か  
戸にうと水の音をよか

存亞  
希言  
恒九  
士切  
会  
八風  
葉兆  
樟棠  
吳心

纂

秋風のたのしみからをよか  
口のちりうらむるをよか  
そらくと風のほいふをよか  
花をいぬるをよか  
響の音をよか  
搔つてをよか  
音を風ふくや捲りよの響  
静風をよかに居るをよか  
花の戸も音をよかに  
向に居てをよかに  
響うらむるをよかに

百雲  
成貞  
百無  
夢星  
心非  
乙二  
会  
常笠  
長島  
号老  
塊翁



みまうしてまゝもくれ板か  
子半のつらりと居るをを  
藤さるゝをを是れりか  
破るを妹かおりのこりり  
つらりの目ももさるゝをを  
美豆や白のををん末  
物凡の戸口吹きりむるをを  
あまふ人をもをりるをを  
ありとさるゝしやををん  
神にうくは計やををん  
舟の飯きりまをりるをを

一茶  
爽松  
電枕  
菅庵  
舟池  
秋拳  
漫々  
星誘  
鐘啄  
成疎  
豪々

地は我家のうへさるゝをを  
戸明れか白の障りるをを  
猫の目もをにまをるゝをを  
あまふにほしむるをを  
松毬の流とさるゝをを  
われ色の有したるをを  
笑つてさるゝをを  
枕の只ををん鬼もをを  
あまふの面ををん  
子規曰りんうつるをを  
葉を葉てつるをを

女  
共成  
君  
乙  
一  
巨  
斗  
似  
洪  
李  
孔



常盤木原系

洞亦ハヤシ志チハヤ木下書  
 碑を杖ていろふや木下書  
 常盤木の原系ハヤシて静之  
 楠ちろや七やりの虫物より  
 とくは木の大きなる花  
 松ちろや大にうつる花  
 葉の尖し松の葉の後の上  
 左中ハ飛遠出て松多し  
 花の葉を  
 色に色に相控して花を以  
 人やそ十とせ余や桐の花

宗 賢僕  
 斗 圃  
 乙 二  
 李 光  
 彦 人  
 護 史  
 護 物  
 保 吉

桐の花

桐の花の玉の井さの桐の心  
 花咲ぬ七度切し桐の木に  
 葉の茂し様に花より桐の花  
 花枝ハ葉ハ色たる花抽か  
 先小桐卷てその花は抽か  
 花抽ちてうて屋の簷か  
 狭く通系を控る花抽か  
 桐の花を花目に集りて買  
 桐の花は軽く花に花は多  
 桐の花や花の咲てもあく教  
 桐の花の心も花むう菊の素

今 路 人  
 松 魚  
 今 花  
 白 花  
 白 心  
 上 花  
 白 老  
 北 花  
 女 花

まご椒

白ひたるまご椒下衣の帯

加賀 正 志 順

枳殼花

家鴨ふに枳殼のふのこぼれり

改 二

柿花

柿花より平端左のふ家集

美 婿

何事の敷にむろろん柿花

至延に免こしなり柿花

柿のふのまをこころん柿花

混柿の志ぶくふと米にり

柿のふろろろと巻と柿ひりり

混柿やあり柿すまのふろり

麦飯のろろに白ん柿花

繡毬花

小てりり平垣花ちろろ今けり

出 漫 可 布 左 弁 壺 弁

白丁花

まろろのふや口角に白丁花

九出 一 玲

藜 棧

世の中はまろろの藜の棧

橘 桐 花

あろろたる橘桐や口角に花

志ゆる花をまろろれて花

不返言風喉者へしゆろのふ

花 茄子

あすも見ん初花茄子家茄子

花茄子ふれらも那之のなろわ

初 茄子

ろろろろろの帯を初茄子

京へ出て秤にけれ初茄子

初茄子棧花を口角に

九出 吐 貞 佐 無 轆 乃 亮 美 九 宇 笠 五 郎 馬 逸 班 象

芥子 芥子 芥子 芥子 芥子 芥子 芥子 芥子 芥子 芥子

多ふらん明とよやからん初芥子  
初芥子あつらう花の咲にかり  
花とらんしるれふとそ初芥子  
鳥羽子のあれ芥子もちりりり  
うよまうまの類んやふ芥子  
白無し芥子れ葉の濃 葉  
芥子んてん友いゆふて面白き  
粒白に似たり芥子れ一む廣  
筆の義の葉肉や落しとし  
たげのそやあはけくや辛き  
芥子のそやあはけくや辛き

一草  
人  
護物  
成英  
長翠  
成英  
甚牛  
甚村  
甚老  
成英

芥の子れ枝は遠くまのしよ  
たけのそやあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き  
芥の子れあはけくや辛き

保若  
重厚  
又明  
存世  
寸来  
士切  
人  
柱入  
恒凡  
少冠  
成英

竹の子の節は節に節に節に  
 夏に生る竹の子の節  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に

葉  
 乃  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉

嬰

竹

竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に  
 竹の子の節は節に節に節に

葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉  
 葉

條

子



龍公そのうらななりやあ  
 子規うれに曇るる江月か  
 とる花の空に帯れや子規  
 心越そそを回に低し龍公  
 大いハカウの春之龍公  
 龍公吟木とあらしを杖極人  
 子規鳥花あらしがた子規  
 社宇より花あらし光にたり  
 吟人と女追は居るさしれ  
 自凡の衣帯を舞い公  
 子規より杖の葉と白上

公 鉄船 斗入 公 結石 公 吉阿 梅人 存 亞 公 大江丸

付るるさきむのうらな  
 子規路過ハカウの空食か  
 龍公舞花の影さしれ  
 子規起してさしれ人衣  
 故にこれ掲にさしれ時を  
 社宇より花あらし風を  
 龍公より杖をさしれ  
 吟人とのさきむ映や居るさし  
 寄鶴鳥にあらしを白帯  
 何極るも春のうらな子規  
 心越そそをさしれ龍公

公 公 公 公 公  
 公 公 公 公 公  
 公 公 公 公 公  
 公 公 公 公 公





子規啼やうふ世の心の中  
子規あ風りうまき心の家  
足くさうにうんあむ時を  
この節を人もまらん子規  
ちうくいとんを打上時を  
まやまのま本とまりて子規  
燈おんをくも能く(郭)に  
子規まにや路かちりり  
まにに啼ひあむし子規  
松折も妹さうと郭に  
瘦骨丸肉喰ひにまを子規

左琴  
木僊  
道隣  
成貞  
公  
公  
善年  
完来  
公  
折也  
浪

ハ

子規やうふ心をまにりせ  
君々代のやうにうれや子規  
時を打ひたつるまを人  
子規天の川風打とれあ  
町をまにりんあうこの  
まを人まをりまをと郭に  
まをあやんや井の町を  
町を屋をれくえぬをた松水  
まを人によろく屋をまを  
地ふりりて啼てまをを付る  
まをあうくまを人出直る

善  
宗志  
鬼子  
車火  
祥来  
秀成  
公  
公  
可起里  
公  
公  
善三

花のそへ腕に隈あり時を  
まをたや月のくとうく子規  
子規啼え江上数聲暮  
小笹生もあつじはつ子規  
ふらふらに位つけり子規  
いささしくは口りたて子規  
あはれ初言あつじはつ  
とてあつじはつとてあつじ  
あつじはつにちけり子規  
子規一人一時的にわらふ

白柳  
左規  
今  
今  
乙二  
一子  
貞花  
今  
冥  
大阜  
岳捨

春人の心をよし子規  
初言あつじはつ花の  
存花節まわりのうり子規  
火更にやうく心子規  
去るに身つらうけ子規  
子規まわりのうり子規  
あつじはつ子規  
子規まわりのうり子規  
今春にまわりのうり子規  
このまわりのうり子規  
時を捨のあつじはつ

今  
今  
月花  
半角  
左規  
今  
素由  
一茶  
素由





子規花の中へに家ニツ

昼の戸をこして空へか子規

花のちるに似たりをきか子規

あそびを望みかきとまうそ子規

花のしるにまうのまう子規

ひんしよりまのまう子規

そのまのまうをきか子規

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

時を待たれあそび人座し

子規星を遊のまうたり

雀

壺

其成

鶴鳴

湖才

後塔

相翠

空河

菊也

白考

飛雪

子規

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

子規まのまうに似たり

雀

壺

其成

鶴鳴

湖才

後塔

相翠

空河

菊也

白考

飛雪

題叢長

字考入

子規を隠れりし白牡丹に  
 子規をのとりてそのと  
 時を争ひしものよりり  
 子規啼く木末にすうけり  
 時を争て出づる風の音  
 子規啼にけりしものより  
 熟言は衣根の上にも  
 鶯を幾分とまぬ時を  
 鳴るは風の葉もも子規  
 子規をとりてさうし度  
 字の考を入てりし海草系

似藤 得山 桃葉 陶里 尼葉乃 成石 折作 士川 方舟 瓦展 友風 左第 雙表二

老 字

考と入れし字考の粒探か  
 字の考を入りしよりりて  
 人の老字考のをえぬそを  
 考と小中の小冊も老を考  
 考ハ小中の考も考と  
 考ハ合款の子りて老るか  
 考よりりたれは考老とり  
 考の折れし考して老より  
 考を老をうりし考を  
 考も老るは考を  
 深山様老考を考れり

柳起 少高 乙因 士現 之顧 丘考 一茶 危介 双為

鳩 旭

蕙々ふまてに号老ふらり  
 号れ老を和て千山の契  
 号ハ老ぬつり花名の香  
 采子も亦ハひふ花名に  
 号ハ咲ぬつりしとて鳩 旭  
 又れに号てとありさう之布敷  
 作古し本老しなり采子号  
 采子号成五尺号松の契  
 井く尺年ハ割て号て号  
 貴者ハ任人ありと号て号  
 号て号つりる(号うつ)

魚文 惟平 義色 号解 蝶夢 薨左 全 采更 全 卷阿 號甚

未

号

号て号つりる花名を号れ  
 号ハ号く二ツの号の号  
 号撰を花に号り号て号  
 号ハ号つりる号号号号  
 采子号様の枝も号て号  
 号て号つりて号れ号号号  
 号て号号号号号号号号  
 号て号号号号号号号号  
 号て号号号号号号号号  
 号て号号号号号号号号

全 号撰 全 采更 全 卷阿 號甚  
 全 号撰 全 采更 全 卷阿 號甚  
 全 号撰 全 采更 全 卷阿 號甚  
 全 号撰 全 采更 全 卷阿 號甚

題叢友



於此し 吟 其 似 公 徒 せん こと  
 うん こと 乃 公 兄 ぬれ 於 此 し  
 久し 色 あり あり あり あり あり  
 久し 乃 松 林 林 を 志 する あり  
 久し のり し 心 沙 曼 たり こと  
 久し こと 乃 松 林 林 を 志 する あり  
 尾 七 あり あり あり あり あり あり  
 喜 々 々 々 あり あり あり あり あり  
 牛 乃 此 乃 合 合 合 合 合 合  
 久し こと 乃 此 乃 合 合 合 合 合 合  
 久し こと 乃 喜 々 々 々 あり あり あり

全 不 徒 恒 斗 柳 存 誤 浙 士 全  
 全 不 徒 恒 斗 柳 存 誤 浙 士 全

歩 あり あり あり あり あり あり  
 樹 を 志 して 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 乃 花 に して あり あり あり あり  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 久し こと 乃 楓 の 花 あり あり あり  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 久し こと 乃 乃 乃 乃 乃 乃

連 日 樗 雲 ノ 旦 葉 飛 成 員 今 之 顧 午 心 可 粒 里 全 善 成

んてちやうくさむ先へおりのり  
 えこちたしもたれはれはれ  
 夕暮ハなごそちうたれんこち  
 んてちやうくやれり遊さん  
 けりくと花あされつんさ  
 夕暮ハ蝶もくふゆんこち  
 んてちやうくおはむもちり  
 吹れ来て一りちやうくやんこち  
 えこちうれも浮世を提ち  
 ぬるちやうく西にちやうくぬんこち

為三  
 祥木  
 不零  
 左老  
 全  
 月尾  
 志新  
 岳路  
 竜雄  
 号笠  
 桂裳

鳴せんでさむのつんんこち  
 一強き梳人さてんこちり  
 起りよりちんさいちやうんこち  
 深と路十故人もちやうんこち  
 着筋の毛もさてんこち  
 んてちやうくそ風さちやうへさ  
 吉りの印りりりりりりりり  
 んてちやうくも囃つちやう来て  
 んてちやう鼻の先ちる木の枝に  
 人しちやう花も吹ちりんこち  
 んてちやうおれん八人ちやうれ

衰丁  
 菱亭  
 寛松  
 長島  
 匪侯  
 孝剛  
 一榮  
 妙女  
 女志守  
 卓池  
 護物

豆播り癖に成りりんこと  
 白雲の情をさかすれんこと  
 兄こそ家あるまはるまは  
 牙ぬくの歯ぬきしんこと  
 白人ハ地とりふらんこと  
 兄こそ吟うはれもさるり  
 人ありいこと平いれんこと  
 洞心は書こ交おそえんこと  
 兄こそちりやん水のむつに  
 兄こそ河の舟もたそるれに  
 舟もたハ似るまもしんこと

柳河  
 女  
 甘翠  
 大和  
 幽喃  
 飛  
 阿量  
 扶光

吟下を介へうつれんこと  
 瘦たてて残りうさるんこと  
 兄こそちりやん水のむつに  
 大名も洞ふてさるれんこと  
 世を捨てさるれんこと  
 兄こそちりやん水のむつに  
 敵とや不才をうのんこと  
 虎をを見てさるれんこと  
 三つおれ鏡取鏡下んこと  
 人の来て崩壊さるれんこと  
 兄こそちりやん水のむつに

何丸  
 壺半  
 戸一  
 升左  
 橋差  
 虎  
 沙路  
 虎  
 下壺  
 存策  
 存底  
 木老

鶴

割キハ華ウク鳥ニ

画房のすのけとあはれんてさ  
 入てさ竹の古きに身をまはる  
 世の中のをに疎しんてさ  
 りんこちさるれか訓てさるしき  
 日さるれ初言もさるりてさ  
 方圓を羽先物にりて表之  
 菱の白粉の鳥見るまゝ  
 菱かやゆに初は粉の嘴  
 尻しかり竹に柳にわさ子  
 隠蔽いふをさるれりて子  
 りて子身を足さるれりて子

之云  
 白蝶  
 一風  
 左節  
 全  
 白梳  
 竹枝  
 白梳  
 菱占  
 又明

素人加

白ちと色をいふわりの子  
 素しとて素しとてわりの子  
 芦のまはれ今より素しとて子  
 ちるはも地味とてやりの子  
 荷葉ふもよりらんや素しとて子  
 履かきふ素しとてわりの子  
 杖にする竹の夕をりて子  
 うまももいして素しとてわりの子  
 五枚中に穂をもちまわりの子  
 りて子身の九つとてわりの子  
 ちる身のあはれ素しとてわりの子

踏石  
 一人  
 一草  
 左壳  
 全  
 宜麦  
 志字  
 胡準  
 梅翠  
 下友  
 素吹

題叢夏

葭 割

よきやうな草刈苗も扱はるらん

下位

保吉

よきやうな草刈てまゝも草刈

保吉

よきやうな草刈を足元草の画

保吉

よきやうな草刈を人に吹き

保吉

よきやうな草刈を人に吹き

下位

保吉

鷹 入 村

鷹にやうな草刈にたれも草刈

保吉

鷹にやうな草刈も風ま

保吉

鷹の草のたれも草刈

保吉

養 鷲

養鷲やうな草刈の腹ま

保吉

養鷲の草刈も草刈

保吉

養鷲の人を草刈

保吉

枝 垣

枝垣の草刈も草刈

保吉

暮

暮の草刈も草刈

保吉

暮の草刈も草刈

保吉

暮の草刈も草刈

保吉

暮の草刈も草刈

保吉

暮の草刈も草刈

保吉

暮の草刈も草刈

保吉

蚕 蛹 出

蚕蛹の草刈も草刈

保吉

題 草 取 友

子子

子子子子子子子子子子子子  
 子子のりたさよる小所  
 子子や改にさるさの信沈  
 子子の世をさるさるさる  
 子子の浮てみる所静より  
 子子やと居しとさるの教  
 久立のありを括るさるさ  
 教先に来てたはるさるさ  
 子子や（は）筆をさる作れ  
 子子ハハの飛蝶出さる括さ  
 子子裂て括る久遠さる括さ

飛水 飛馬

蝶美 希言 三付人 一方 魯自 席睡 吉感 旋剛 百地 尺文

致端 飛牛

意に供へられさるをたつ所  
 舞りくやんたあさる所  
 子子の風き角さる括る端牛  
 子子ありとさるれはさる端牛  
 端牛や子の角文をたさる  
 子子のありさるさるさる端牛  
 端牛 子子ありさる浮もさる  
 子子さる花の産のさるさる  
 子子さるを余り木末の端牛  
 子子に向て何れ用さるさる  
 子子掬にさるさる端牛

右棧 岳耳 曉甚 薨左 荃村 公 白棧 百川 大以丸 八咫 秋瓜

題叢長

蝸牛世にあり甲斐にこころ  
 伊勢の家来のふれり蝸牛  
 巾にふれりふれりふれり  
 若多れ道ふふふふふり  
 紫ぬいて柱てやらる蝸牛  
 心まを趣もあふふふり  
 家持ふ枝にふ遠る蝸牛  
 ふふふふふふふふふふ  
 田螺より一匹ふふふふ  
 乾露や白雲屋のふふふ  
 ふふふふふふふふふふ

有堂  
 士朗  
 素輪  
 椿堂  
 春感  
 牛心  
 吉牛  
 一草  
 瓦瓦  
 奇閑  
 玄卿

乾露や白雲屋のふふふ  
 松風や一り動くふふり  
 見たりして角を出り蝸牛  
 いふしや角ありとふ蝸牛  
 まをふり母れ見ふふふり  
 ふふふり落て亡れぬ蝸牛  
 万のふれり花り此角や蝸牛  
 田にふれり四のふれりや蝸牛  
 りくして成人もふれりふり  
 蝸牛危い事つたのいぬ  
 蝸牛それとほつこの家ひら

一茶  
 羨亭  
 土斐  
 塊翁  
 蕉翁  
 瓦全  
 椿堂  
 春人  
 今  
 紀遠  
 女志宇

てんまをりたてては焼いり  
小言してふらつたりわ鳩牛  
鳩牛それたの家もまけり  
干菜ももろくきありあり鳩牛  
角ふらハ文にむきさつたり  
家たけの家はやすけやさつたり  
とぶ世にさへて見れさつたり  
白たれた角されさつたり  
案抄しタマも信んさつたり  
さつたりりつたはれさつたり  
遠生のりつたはれさつたり

快甚  
文角  
有斐  
南溟  
左文  
思  
是亮  
伊勢  
風也  
李東  
ト

抽  
誕

案抄しやさつたれくの鳩牛  
折れつり遠んなり鳩牛  
家世をも斯う送りたさつたり  
まきの市もさつたりさつたり  
後たはけつて見れさつたり  
さつたりさつたりと見れ見れ  
己うけ見れさつたり見れさつたり  
何さつたりさつたりさつたり  
家まきのありさつたりさつたり  
折れたは後天もさつたり 誕  
抄のまに鬼けりおのさつたり

古  
支白  
李尺  
柱  
可  
可  
可  
南皮  
文角  
栗  
旭  
女

題叢夏



枕元鏡

たろく已既にのろく下竿の先  
いとよき人もあつらふも己  
枕の元鏡よりし 茨り丸

露女 花明  
下 求一  
咲甚

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

俳諧後日懸業夏中

五月

甚五左并群

孫毛龜の道にまゝ又自か  
一月六日に名をくは又自か  
多るのねえつたつる又自か  
水字ハ花の葉の又自か  
枝にハ越られハ又自か  
深心木の底に水す心舞自か  
り先に世に控てある又自か  
糸の房と鳴く又自か 露馬  
杞まくの心又自か 八重花

白権 松尾 士郎 井六 有三 雪笠 三海人 菊也 葵葉

題叢爰

尊像

若水名を夏ふくしき又りぬ  
み水のあやめを走つ白ん水  
竹撮やましく切れあやめ子  
胸在にあやめんせうえあうら  
親の手に小浪のうらあやめか  
戸船れはるその親えはあやめか  
溢一舟入るとはるあやめか  
山越に江を押さるあやめか  
花あはれもあやめかあやめ子  
結てまはれあやめうつる後女か  
あやめ子と又りた子あやめりり

下原 梅史  
薨左  
長翠  
業五  
吉成  
乙二  
一平  
素園  
素榮  
魯隱  
申為

五  
瓜

尊像

旅人のまにやうなあやめ子  
かりそめて切るあやめ子  
るれははくくのあやめり  
短おを撰て持よりあやめ子  
白雲のうらあやめりあやめか  
襟うらもあやめりあやめか  
世の舟をさるあやめりあやめか  
引かてうらあやめりあやめか  
長くと脈に子たりあやめか  
川岸れ初氣これあやめか  
花美のより磨げらあやめか

下原  
石観  
鳥醉  
白境  
刀居  
蕉句  
亞後  
井肩  
志宇  
元介  
栗女  
栗女

朝音落

吳非の代々もずと音落矣  
女もありのいものもあやめ  
音落てあやめしは朝音落か  
朝あやめ市に半るおれい  
朝の字もふあやめあはれ  
朝あやめこれや一日た忘  
後初は朝あやめあはれ  
梅の後あやめあはれ朝音落  
あやめ音落て朝音落あはれ  
世の音落の瓦もあはれ朝あやめ  
音落にふはかろふおを朝あやめ

核堂  
流内  
系更  
白旗  
保吉  
全  
一醒  
成員  
完来  
一平

音落酒  
音落湯

又六の次にあはれあはれ音落あやめ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ  
あはれあはれあはれあはれ音落あ

女志字  
金塔  
梅子  
三雷  
白旗  
全  
保吉  
右範  
権剛

題歌長

言齋刀

君の代のたりに百个より刀か  
はるま刀三ハあるり教か

秋也 見推

芳齋步

夏も歩速の心ハゆるし  
君の代や下地すれて百个抄

又明 保吉

葉の玉

葉玉の个むすいふるそれ等  
葉玉の个却下美に葉すし

葉言 葉甚

印地歩

弦すゝハ親の心そ下地歩  
煉子て流之れり又ハ刀

葉柱 貞佐

百煉鏡

すし下男の片く葉  
それ戸や粒とほく費の交

今 白権

はるま粒もすれ葉湯か

保吉

又ハ白に粒て見方る粒か

感吉

美ハ粒踏すもそれ葉

騎石

ハ取やひりかすれ葉粒

士成

葉ハんいらくもほく粒か

今

白偏に葉あるをり葉粒

吉成

投込て見方る葉之葉粒

成良

葉色あるすの个粒の粒使

乙二

壹粒乳母のハハ身そ个

茶丸

度もて葉れさすく葉粒

菊也

字益

題葉夏

拍餅

粒粒み返もろりし十固子  
馳走をまふぢ云ん粒小  
夕粒米の粒はにゆりゆり  
名女のむさくそふや拍餅  
懐兒や傳へ甘茶のまきあり  
源氏画や武末の懐糸の糸  
まきしりふりこたる懐竿  
ゆりゆりふりてり懐糸  
まきゆり規おりの厚り小  
君代の片味方ド一懐糸  
板りのまも久しきの厚り小

旦く  
柿岡  
女演藤  
藁山  
柳丸  
保吉  
不次  
一詰六  
升六  
木僂  
片唐

胡掛兜

茶字摘

ふりもも勝て懐の元か  
桐畑の縁すれまの厚り小  
白をへ勝て地ふの懐り小  
余はの子おの厚り小  
掃掃、来てまふまふ孤懐  
陣白の巾にまきり初懐  
まふ懐孤細すまふ世お  
まふ世と古まもまきり  
まきりもまきりまきり  
百字下見まふまふも忘ま  
戸火費てまふまふを待にま

身隔  
其梅  
山松  
大木  
有斐  
周作  
披去  
子鳳  
又新  
虎送

題叢友

加茂競る 鼻息の上より又出てくる  
 競る 鼻息の上より又出てくる  
 翠 崖越の注に流るる水  
 むつり 山を越る水  
 世 天つと光もさるる水  
 犯 たる水に流るる水  
 多 水も平八つの中を流るる水  
 之 水の上の鳥にあらる競る水  
 之 水の上の鳥にあらる競る水  
 見 入る水に流るる競る水  
 花 水もさるる水

凡 童  
 全 竟  
 全 印  
 全 文  
 全 條  
 全 士  
 全 非  
 全 考  
 全 籟

竹研日

竹 植る日も人に来て植る

竹 植てさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

竹 水もさるる水に流るる水

士 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

全 飲

題 歳 亥

花 首 房

花 首 房 花 首 房 花 首 房

凡 童 全 竟 全 印 全 文 全 條 全 士 全 非 全 考 全 籟

石翁翁

むすふに石翁翁と云ふは

石翁下清の元も兼漢時

石翁をよまふ事ありし屋の境

石翁下清のれも水もいふ事あり

花且身

ふらふらかつて張りて其具是

世の事かたがたてひる事あり

溢るるぬ里のふらふらふらふ

瘦うの根こそや喰わぬ事あり

美蕊刈

種久良堂大なる美蕊刈

美蕊刈 花を鉄筆の水前

蓮春系

よきこととてやい蓮の花をわ

蝶美

若感

序人

年々

曉甚

白桃

護物

李甚

也骨

野牛

丁度

蓮浮世

浮蓮に魚をうんとそちりとも

池の蓮を葉浮世の風情あり

花の亂を登てり大蓮の花

蓮咲ていやはやあはれなりとも

月入や花を文に蓮見舟

白蓮に人の子とてはあけぬ

吹賣の浮世に極る蓮見舟

日充ちて蓮の葉の風をいふ

美咲うらやまをいふ事蓮の事

咲うとてふとれりや蓮の花

白蓮に夕暮を花るありとも

蓮

北

乃光

定左

周更

夕醉

几董

鬼左

甚村

花縣

蝶美

百明

白桃

題蓮

人まじ蓮のうへりこころ  
ふ蓮のちやうきをわらう  
白蓮に傘をさしむらさ  
村のうへに上り蓮の花  
あつたときまきまきの蓮の花  
屋敷のうへに蓮の花  
心の中ふまき蓮のちやう  
うつらひいふとうはす蓮か  
杯ふきの提はさる蓮の花  
いと水の中静まり蓮  
蓮のうへに女帷子さる

宝漢  
香明  
保吉  
斗入  
士佐  
全  
恒丸  
全  
橋雲  
全  
成貞

蓮

蓮のうへやさるる蓮  
白の蓮をと一味に雨をり  
雲雲にさるる蓮のうへ  
あつたときやうは起て蓮を切  
大うの蓮のうへに上り  
新造やう一のうへに蓮の花  
新造やうのうへに蓮の花  
はりしに蓮のうへに上り  
白のうへには蓮の花  
風をさつたかき蓮のうへ  
丘のうへに蓮の花

先未  
伊原  
午心  
高云  
一平  
左差  
全  
全  
与  
一葉

題蓮長



藤花

白蓮のそりたるまゝめこそなりけ  
 公蓮や根ぶの干し風の中はれ  
 疎多れさうりれもやん蓮の花  
 公やれ咽こころむ蓮の花  
 蓮ととも咲てあすり外はあじ  
 白蓮の一掃咲ぬ橋の中  
 藤よりと枕とれより蓮の花  
 蓮のまやさうりしてりたあす  
 藤の花や序もれをたれよす心  
 乃田の刈藤花さうりた白  
 予の花やあすはれたれ風さうり

柑翠  
 沙生  
 寿翁  
 釣翁  
 白老  
 東瑛  
 藤左  
 夢麻  
 夢村  
 金  
 白雄

予の花に吸是るん松子か  
 予の花やリリリなり湯院  
 引及や浮藤の花のさうりさ  
 心よりた押さうりり浮藤子  
 予の花に夕風をよと起りりり  
 予の花に抱ては捨へ余か  
 七の花やさかりやうりり花  
 此花やさなりたれと情れん  
 よとこ花もはむじりりやも共花  
 村ややは藤さうりり花ひらく  
 予の花や咲は咲たり藤根の子

不五  
 咲菫  
 蝶更  
 悠吉  
 兼波  
 藤白  
 白芥  
 乃亮  
 金  
 一草  
 富光

題葉夏

岸

水くびて既に浮塵花を  
 まの花や水のさう人を嘆亂す  
 まの花や風さうとさうと  
 岸や岸大力の押へて  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り

鶴基  
 瑞馬  
 縫啄  
 女  
 百代  
 白燒  
 保吉  
 重厚  
 斗入  
 巽六

岸

岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り  
 岸にさうれ子持入り

遊日  
 長翠  
 寺剛  
 一葉  
 亞笛  
 田人  
 志宇  
 輝剛  
 斗白  
 全島  
 瓦法  
 旭山

願叢書

菅花

菅花さるに子供のはのほのほと  
扇花花より見ゆありし水  
岸やひかり水の案内し  
岸をくわいてわきまの風  
村や豆はるるそとほのほ  
星流し様の故中下菅の花  
菅花ぬそ花咲ぬそ持ぬ  
灯もさやき屋しをそ菅の花  
笠をきて十のさそ菅の花  
ひやくと風もやそ菅の花  
ありてありしなり菅の花

栗大 下 起石 木 子 麩 士 合 洪 乙二

菅の花人なりけりう打ひひり  
株人の魂を来りて菅の花  
今の来てはさそ菅の花  
石家の流や光そ菅の花  
跡木の煙鳴り菅の花  
唐の菅花さそ菅の花  
吹くそ自の風そ菅の花  
株の葉に咲り菅の花  
松風の流りに咲る菅の花  
たのしみありて菅の花  
花さる菅さそ菅の花

亞波 菱 桂 奇 蕉 一 氏 三 志 梅 代 雲

百合

雪のうけもすむくと昔の花  
水香を夏風懐あり百合は  
心ゆり下昔くは雪露の立派  
心ゆり下齒葉の乃より一々  
ゆり花の元をよほは心路か  
ゆり葉て花中の花はゆり  
梳露下のゆりうつく天香か  
さゆりの雪のそよそ伏草か  
百香をいふ色も花ゆり人に  
ま迫く花心のゆりまをゆり花  
谷をた下て残いゆり花

推己  
女子代  
薔左  
白檀  
士郎  
葉兆  
成貞  
左亮  
全  
奇剛  
素迪

紅藍花

忘草

萱草  
下毛花

赤ゆりや口ぬて花の里の犬  
暑がりや指もさる花の衣  
男をなつ手せよさる花の衣  
あつた花をてつりも花の衣  
五つむや雲に旭の昇るうち  
花をたむくしる花をてつり  
忘草の花ハこもも咲きなり  
久風に夏忘草うらふたり  
足板らうそあつた花の衣  
家の株の萱草咲ぬ花の衣  
志もつけやりに花の色

寛松  
女子代  
石嗽  
其苦  
大方  
尺文  
系更  
猿左  
下郎左  
魚文  
吉岸

題葉夏

金銀花

夏菊

夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家  
 夏菊の清極凡ゆる花家

左弁 百明 花縣 恒丸 棠兆 平角 考笠 瑞亨 柳尾 覽甚 百明

紫陽花

紫陽花

紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家  
 紫陽花のすきり花家

玉工 仁桂 全 保在 又炭 恒丸 雲馬 成員 女白柳 左老 素葉

題葉夏

### 瞿 麦

生陽志のやむぬきりきと我哉場  
 生陽志の杉る平白をまきやうに  
 生陽志の花にたむる平像百  
 生陽志のふかむれま毛まきり  
 生陽志にうつりまきとぬのた  
 花子のふまらふんまぬ  
 花子のまきまきれ掉のま  
 花子のまきまきやまをまきりて  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり

護物 北 濱 新 秀 松 江 里 磨 存 亞 恒 丸 華 沱 成 英 全 葛 三

瞿

### 題 叢 麦

花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり  
 花子のまきまきりてまきまきり

祥 禾 可 却 里 一 草 道 堯 全 葵 亨 桂 堂 学 笠 三 舟 人 女 志 宇 梅 洞

考 溲水

見 素月

端之

尺翠

寫山

雄大

秀成

東陽

淑貞

寺 兔山

望 蘇

披子の一本橋に所あり

子にその心天雀の子

披子に鼻至る中至橋小

披子に衣ありし山路小

扇を披子に披き地左小

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

常 夏

石 竹

懶 釣 子

馬 齒 覽

披子の一本橋に所あり

子にその心天雀の子

披子に鼻至る中至橋小

披子に衣ありし山路小

扇を披子に披き地左小

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

老及中時天中中川

常 夏

石 竹

懶 釣 子

馬 齒 覽

邵 瓊 子

存 瓦 賦

萬 葉 歌

藪

村 計 子

言 章 子

十 采 花

一 一 采

廣 益 子

乙二

合

道亮

去卿

書大

怒交

花晚

道亮

望

道亮

柳 卷

心端の杖に片たりついでいよよ  
 忌を風や旅人寄ていらを管と  
 ありてん漢の棠也の志よりか  
 棠の實に片積降る始り風  
 夏の実や杉のりうしるの空  
 去梅片落るや夜の板ひきし  
 去梅に眉あつてもつ美人か  
 梅熟は折にふれたる是く小  
 去梅や抱もつてもはこほれず  
 去梅をそへてわたり小面か  
 落る去梅は去あり棠の杖

棠 一風  
 梅 風狂  
 梅 去お  
 棠 白梅  
 棠 去梅  
 棠 展勢

棠 胡  
 桑 実  
 蔗 実  
 青 梅

南天花

棠花

疲梅水より半はさるる  
 南ての花のこぼるる是く風  
 南ての花に花や枝付影  
 梅の棠や南ての花のちりり  
 棠の花赤くううて梅はさる  
 夕風や去梅はさる棠の花  
 棠ありと去り棠は下棠の空  
 風おにちる去したりたりはさ  
 你去も去地を去れて棠の空  
 梅の去りては棠とありたりはさ  
 梅はさる去の白けたりは花

棠 石麻  
 棠 可廣  
 棠 五固  
 棠 存亞  
 棠 尺艾  
 棠 送亮  
 棠 榭棠  
 棠 吳亮  
 棠 去亮  
 棠 去亮



推花

花のふ人もさきさき白ひく風  
まの葉に下ふまや花のふ  
そのまに木より花を足さく推のふ  
号にけりばしこころのふ  
又り白もさかてうしこつし  
言訖に本陰人とりにくく又  
まのうのさるるあや言訖ふ  
言訖嘆て人いさるる葉さ  
まのちれにりもあや言訖の上  
言訖に風れあやまをさるる  
言訖まよせにちれりるるる

暮書  
二座人  
吳老  
惟平  
十芥菊  
片花  
葉左  
保吉  
恒丸  
年人  
送老

杜鵑花  
公欽花

大欽ちる千毒ちりけりるる  
葉たさるる大欽の是の物の内  
大欽の本は花より多きまよか  
酒のまもさるるやらん大欽ふ  
まよわ世と笑とれく大欽ふ  
夕風や夕歌の大欽のさるる  
短衣は木ももるるりおよ大花  
大欽のまをすまの交さるお酒か  
塩沢のやもさるる大欽の花  
食柝の花やあやりて笑さる  
白頻る中や笑たる花さるる

東野  
言花  
護物  
金坑  
其江  
画牛  
馬老  
二葉  
秋免  
都雀

煙草美

花 檣

長白に送記をうけては松栢  
花栢栢干や口不枚麴子の  
先子り花栢に碑一泣以  
栢十枕子身の栢人見え  
栢やり飯とをれは世せり  
栢の春ひくをききひりし  
栢のひくへある白ひり  
史をきじや花栢の栢の栢  
栢や子り足なる女身速  
栢や白飯のり大壺とる  
まじりの栢多き徳り

三浦人  
壺枝  
白栢  
保吉  
浙江  
乙二  
奇剛  
奇竺  
竺高  
碓合  
未亮

栢

心 梔子

花栢をりひりり白ひり  
菰鞆の足とるまじり白栢  
村白や足りけきき花栢  
入まのそと咲や白も花栢  
屋りや新立たり心栢  
心多の新て足とる心栢  
とう見ても夕暮まのそ心栢  
花栢をりの片羽の多も来り  
心梔子の栢をしく咲にたり  
まじりの心栢をれ白ひり  
まじりの花子を癖もたり

栢瓦  
燒甚  
白栢  
甘谷  
白居  
孔阜  
枚枝  
星譜  
浮石  
不蓮  
以是

之そちの花十為し婢女詠を  
 口ぢりの笑ころり門の白  
 ころりたるをよむるも公以  
 ころりしに一塵も不花の香  
 空へんて一舞越ぬ交本立  
 空にたぐまの之たり交本立  
 酒十法中まやや交本立  
 おと来ぬ子ぬみぬ交本立  
 交本立人のユミ坂の川  
 跡ま白の甘き白のや交本立  
 交本立家からいさく来たり

護物 床人 了年 氷水 曉葉 薔古 荳杉 白旗 百吹 又明 成兵

白旗に有けの帯や交本立  
 曉葉をたぐまの之交本立  
 斤つゝの海をりて交本立  
 席杖も是して是之交本立  
 いけ来ても夜の帯の交本立  
 人の児の懐かしく交本立  
 是りや燈をりて交本立  
 百姓の富光はれし交本立  
 了紀は歌や抱も交本立  
 川風やあかりたる交本立  
 交本立尸は男たりりか

陸奥

尺丈 道亮 岳輪 床人 壺伯 井肩 都勢 紀途 馬頂 雜啄 竹板

若竹

若竹や眼鏡をまらぬ白の毛  
 若竹や牛のや筋ありしう  
 若竹ハハハハヤウウウウカチ  
 若竹やうま菜室の百こじ  
 若竹のり水あれしうふか  
 若竹に工更のうなる垣根か  
 若竹の家も町言のせりか  
 菜に酔て若竹寂の掃除か  
 若竹に隠者や之焼豆麩  
 若竹の葉にけりれ光か  
 若竹のゆうつりれ若竹

竹酔  
 白焼  
 百明  
 菜丸  
 梅人  
 士飲  
 左  
 成英  
 奈乳  
 長高

今年竹

若竹の打ふそれく伸るるり  
 せいたしてそよげ若竹今のうち  
 若竹のゆりくとして世にうさか  
 若竹や言まら若ハ今の事  
 松を越て若竹の乳歯をうり  
 若竹に水は汲く若竹にうり  
 若竹の家をうりや水焚か  
 風とれまを吹かや若竹  
 若竹のうそれをうりてと若竹  
 若竹のうそれをうりてと若竹  
 若竹のうそれをうりてと若竹  
 若竹のうそれをうりてと若竹

身原  
 一菜  
 申高  
 梅所  
 湖中  
 一夏  
 市り  
 女子代  
 莫左  
 斗入  
 誦道

題葉夏

竹皮散  
瓜 花

雪とりと手のほそくし竹  
人の来て夢見てりやと竹  
と竹さるわおとるふの毛  
風のすけさるさる竹の皮  
仇花よりてと竹瓜 畑  
仇花のたよりしや瓜の花  
畠もりなはありて瓜のふ  
蔓先の水にうさつ瓜のふ  
落てりさのありさり瓜のふ  
いつくさるふらあり瓜のふ  
ありしや竹阿し花ある瓜の蔓

集  
年

雪焼  
栞史  
眠力  
萩人  
焼甚  
吉菴  
青篁  
奇劇  
護物  
三浦人  
栞園

胡 瓜

天瓜花  
早松草  
子 菖

先にあて喰ふあれたる胡瓜か  
君すをう人と胡瓜をうとし  
人のあつたさし心のう瓜  
早松草二り此瓜もあう瓜  
控巻や田中の庭の這入口  
福唄ふ里下るふさ美菴茶  
あれ中へ菴か小言と早菴唄  
さりささえつとまの早菴唄  
植りり七八束に植む子菴か  
のりりあれさ刈菴運瓜  
流来り余は瓜早菴も植り

巻  
七

富春  
白下  
秋彦  
保吉  
存照  
栞莊  
完来  
道彦  
雪焼



植つては自らよの田とせらるる  
 千々と植て去り甲一板  
 吸有又や田植の苗きの板一  
 いとせうの言を田植の古歌  
 此里の存るんは田植の風  
 うくもては淋さるる心田  
 蕨蕨のぬれたるの田植  
 人もう植ていたる心田  
 田を植て風の戸に來りたり  
 戸ののさうにきて田植  
 り合はるとさるる田植人

大阜 道亮 全 等亮 奇園 魯原 蕉白 武陵 芳公 長高 座来

田植

道場人節も来てはる田植  
 戸にきて植て左のま田植  
 松の子も来てはる田植  
 帆のたにきてはる田植  
 床のたにきてはる田植  
 田を植て清もきてはる田植  
 田を植て志もきてはる田植  
 よかりにきてはる田植  
 松風丸もきてはる田植  
 山陰十人もきてはる田植  
 園に打のともきてはる田植

松生 卓池 釣翁 山人 其柳 郁契 木容 丘徳 尺雀 薨右 成吉

題兼夏







松の木やう六粒うう蜂の鳴  
 蜂の鳴て魚送りゆい縄なわ  
 鳴蜂や浮世を風うう椽の本  
 鳴やめは鳴蜂あんで足きんき  
 又やけのやうやけの蜂のや  
 鳴中にきんきうう蜂のひらう  
 蜂のひらう蜂うう木陰に風  
 壁にきてうけいあうう蜂のや  
 蜂のやう蜂にやけいあううう  
 蜂ううやううきりうううう  
 人うう蜂うううううううう

隻  
 尺角 徒呂 存亞 斗入 保亮 尺椽  
 士飲 公 三 歡 奇 成  
 員

ううううの蜂を浮世にのの家  
 蜂うううううううううう  
 蜂ううや井戸はうりひり世はあ  
 蜂ううやううもねううううの考  
 蜂をひいて不形ううう蜂の飛り  
 蜂の蜂のうううううううう 簷  
 蜂ううう木陰の軍や夜の蜂  
 蜂うううううううううううう  
 蜂うううううううううううう  
 蜂のやううううううううう  
 蜂のやううううううううう  
 蜂のやううううううううう

今 祥永 可親軍 公 玄葉 公 道亮 公 月丘 奇劇

山りや春と引増大聖と吟  
 増明や桐元にり乾の内  
 増の明木を流よりも群の之  
 旅人とまのひやうり増の舟  
 明もうし 唾増は中へと流うり  
 明立て志つたうりねこの増  
 増うくやめれくくさる増の人  
 増の青にうりくさるうりなり  
 唾増大黒げに舟とどりなり  
 増大あややまのりそくそく花  
 増大まきとやかたんそくなり舟

平角 桂密 荒印 卓池 彦人 護物 麦左 米光 白人 菅推

増明のつりひるは流片ん  
 増明や池桐の半の葉の上  
 友の増心もとて明にたり  
 増明や子竹の流尺影の若  
 志いと鳥増一やうや夜の松  
 山増や春戸の小水のいそりま  
 増明や眼をさけは旅の舟  
 増明やうりけの字を刈 推く  
 ままの枝作らん増のま  
 此のまの葉をさくは多増の舟  
 鼻節に押あうりなり増大舟

此舟 此素月 久感 吐心 齋命 百枝 尺心 舟子舟 舟 舟 舟 舟

攻

氣のうつろふまわりのすにほのめ  
古井戸や攻にさかぬのまにじ  
上風に攻の流りやせ川流  
まれつじきと攻を焼罷らぬ  
おつゆてくやや攻も書かす  
なれて攻のありきさすりぬ  
まし入や人をとらす攻の心  
玉の珠丸をや焼けては攻か  
攻の中へ松をたほして攻か  
よし田やの攻にたほす伊喜  
攻のつらさをたほして攻か

右竹  
花  
合  
几筆  
二柳  
尺権  
保吉  
南  
岱  
大江  
松尾

題数表

攻なりや群人の是に戦りさし  
攻れ中にまにほたる灯りぬ  
攻の心ほたるは攻にたほりぬ  
攻れをしのぎにたほして攻か  
登天攻れよめは攻にたほりぬ  
荒より攻のあつたほりぬ  
攻の青の氷についたる花は  
攻れつにまをたほして攻か  
おそく攻をたほして攻か  
小庭や鹽とめて攻の速に  
攻れは攻の代にたほりぬ

士  
去  
女  
珠  
葉  
柳  
乙  
道  
瓜  
一

坂のきや花さるる身のはかしま  
 坂ひつにけしむ花よぬにわ  
 平城の豆腐のりぬ敷坂か  
 平城坂や言より出てやまを鳴  
 坂はやまより起る身のを  
 風笛はま梳ちり平坂も鳴ん  
 坂に捲りり平をさるる舞うる  
 外巻や鳴ぬ坂のて月にあつる  
 庭松に酒吹て坂をたるとん  
 平の坂をさるる平打控ぬ世歌を  
 平の坂をさるる人し坂にけしむる

眞こ  
 長高  
 一茶  
 平角  
 平人  
 石浦  
 五老  
 杜厚  
 可知  
 茶嶽  
 世歌  
 平

坂  
花

坂のきや花さるる身のはかしま  
 坂ひつにけしむ花よぬにわ  
 平城の豆腐のりぬ敷坂か  
 平城坂や言より出てやまを鳴  
 坂はやまより起る身のを  
 風笛はま梳ちり平坂も鳴ん  
 坂に捲りり平をさるる舞うる  
 外巻や鳴ぬ坂のて月にあつる  
 庭松に酒吹て坂をたるとん  
 平の坂をさるる平打控ぬ世歌を  
 平の坂をさるる人し坂にけしむる

無底  
 春来  
 吉貞  
 右弁  
 院甚  
 蕉白  
 霜操  
 牧童  
 一茶  
 茶芳  
 由之

坂を火

坂を火の中をゆく風もさふらぬ  
坂を火の煙の末に鳴坂は  
遠坂の多きを志にゆく坂を火  
寂寂や細き坂をのりてき  
坂を火にむき打れと氣に  
心正の坂をハ心の自心か  
夕乃く坂をくへつ岡の家  
坂を火のまきて暮ぬる麓か  
浪うつ平坂を華のこりの自  
打りて子れ朝の坂をやゆり移  
松にまきそれまも坂のまきそれ

集 魯白  
耳考  
保吉  
今  
松石  
外六  
業兆  
世子

題 坂を火

世をまはす心のなれたも坂を火  
木をけけに白をまき坂を火  
雪にうすりのけて坂を火  
坂を火も白も宿の松の枝  
坂を火や扇のつむに葉の秀  
坂を火や垣川の鳴も志をり  
坂を火の中をゆく風もさふらぬ  
坂を火に志にゆく平坂をのり  
坂にもるま細き坂をのりて  
世の中のをのりて坂を火ゆく心  
坂を火ゆくまき平坂をのりて

成 天  
ノ 旦  
午 心  
又 旋  
可 教 星  
善 三  
不 寒  
塊 前  
武 陵  
号 笠  
申 高

改き子

改き子しるるまゝにたる指か  
 奔りの改きをてそ風いふか  
 ときとれか湫の柄息改きか  
 起されてま侍ふ秋の改きか  
 十又原のれもし改きをか  
 さいのさいにゆりこ改きをか  
 改き火や部のあたるも人の位  
 きとる花の枯枝を改きをか  
 うわそのま乳にたる改きをか  
 白れあのみりたるなりりか

一茶  
 魯隱  
 秋夫  
 憐霞  
 夜來  
 栲園  
 鬼洞  
 而辰  
 共映  
 天  
 恒丸

管

管火や木の管やわ指の素  
 管賣すしの段中あよりり  
 管のうへに吹くはるるか  
 追れよふにたるとくはるるか  
 精気の神の素言又管うれ  
 飛や管管人を訪ふ者の素  
 びる松や清んといふり管  
 やあつて清素をこゝ管か  
 出通して管はつて管うれ  
 之れくや管素たれか管  
 白れあのみりたるなりり管

柳虎  
 管  
 管  
 管  
 管  
 管  
 管  
 管  
 管  
 管  
 管

願叢夏

久美を管ひつに定めり  
 来ぬまの山のかみは管  
 きてふにりて踊る管り  
 海白の口又天の管り  
 花如ものほかるを管  
 傘に舞えて度る管り  
 藤原ともうて夜明の管  
 改風の松を舞うし管り  
 ちる管荒の夜の花管  
 舟下流のふつ管り  
 人々のあつて志つ管り

戸 園  
 不 明  
 感 喜  
 今  
 斗 入  
 梅 人  
 花 城  
 夜 丸  
 喜 成  
 吉 翠  
 南 岳

芳れりや大井原をり  
 之れまの風いそいそも管  
 登見さし心の管り  
 管をけけ清くも管り  
 濁空の管り  
 舟の管り  
 風の管り  
 舟につと打よ管り  
 舟おて子に管り  
 蹴踏の行管り

士 城  
 成 英  
 文 左  
 完 来  
 喜 成  
 舟 枝  
 可 拉 運  
 今  
 心 泥  
 心 非









編  
蝠

字のまや世の平よしと塊とま  
 塊をうつめちひいよまふか  
 棋の平やまふ人ありて塊の元  
 菓まの塊道ふ乳や羞くし  
 系とまふ人と打まふ奔の塊  
 おまにまふま塊のつりか  
 沖中やけをとまふよまふの塊  
 梅場やひりしの系の塊  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ

一茶  
 香檀  
 小元  
 菱子  
 枚長  
 有奇  
 立志  
 寛古  
 益村  
 保吉

題  
叢  
夏

梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ  
 梅場やひりしの系をまふ

九講九  
 香三  
 米卿  
 月記  
 一草  
 道亮  
 一茶  
 塊翁  
 井眉  
 晚翠  
 美沙支

水鳥巢

坊坊や若草より鳥に飛  
 坊坊の草は深き柳の  
 坊坊と留まの坊の漢の丸  
 まのまを丸を六房のせらる水  
 つらうたて魚のうろ浮菜か  
 坊坊や浮菜を浪のうろ時  
 水の菜に坊のまうて成りたり  
 この白におのの代の浮菜か  
 浅きうろ浮菜に雲をたり  
 急な風と坊の浮菜のうまふ  
 まのうろまうてはんて浮菜か

後駕  
 松旌  
 輪之  
 恭人  
 梨子  
 今  
 樗也  
 槐翁  
 三浦人  
 菊也  
 寛松

水鳥

水にりるのせり浮菜か  
 水の菜のうろ柳をまを丸  
 水にりるにり坊の浮菜か  
 親子の親にりり水に浮菜か  
 親書のうろ丸をうろ浮菜か  
 親子の浮菜をうろ丸をうろ  
 四阿丸をうろ丸をうろ丸  
 更り丸をうろ丸をうろ丸  
 園田丸をうろ丸をうろ丸  
 菰子丸をうろ丸をうろ丸  
 丸をうろ丸をうろ丸

集

梅川  
 子影  
 孕年  
 釣翁  
 舟丘  
 湖水  
 舟跡  
 菜子  
 菟子  
 今  
 曉春

題葉及

落月夜見ぬらうりけいふふ  
 ありきくくくくくくくくくく  
 橘の花ふきりりきりりか  
 白きよきくくくくくくくく  
 橘ちん老くくくくくくくく  
 何う家へんくくくくくくく  
 村白くくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくく  
 西風やくくくくくくくく  
 松凡くくくくくくくくく  
 白の月夜くくくくくくく

有明  
 印旋  
 感書  
 殊石  
 書川  
 恒丸  
 士飲  
 今今  
 桂又  
 丈方

此くくくくくくくくくく  
 予くくくくくくくくくく  
 驚賦くくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくく  
 就焚てんのかくくくくく  
 吾くくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくく  
 ぬくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくく  
 吾くくくくくくくくくく  
 かくくくくくくくくくく

有明  
 栄兆  
 完来  
 丘  
 可  
 今  
 一筆  
 心非  
 乙二  
 秀剛  
 及秀

題詠長

打の言に自ら居ぬふら野か  
と云ふも亦明て教の事なり  
是ハ持て居るもししらぬ云  
孫子のたるこを是の云ひこ  
云ひまの室の酒をハ持て居る  
正曲を家の東や鳴る云ひま  
中を云ひに小を云ひまの云ひま  
凡所るくも云ひまの云ひま  
其持も云ひまの云ひま  
岸の取て云ひまの云ひま  
云ひまの云ひまの云ひま

魯原  
美高  
月化  
半角  
模半  
蕉可  
井肩  
号云  
護物  
三行ノ  
于安

初も云はれぬ  
田の云れ云ひかたなる  
所は川南と云ひかたなる  
少の云ひまの云ひま  
田一枚云ひまの云ひま  
云ひまの云ひまの云ひま  
徒やうの云ひまの云ひま  
家云ひまの云ひまの云ひま  
叩く云ひまの云ひまの云ひま  
於森する云ひまの云ひま  
鳴る云ひまの云ひまの云ひま

漫  
来邦  
釣翁  
掬  
水高  
林帆  
詠陶  
徐英  
應  
二  
確  
会

粉川

二つして恋ももたらねんさか  
まらたたくくまふたふのよさ  
阪のくまふたふをいりたり  
老なりれまふたふをいりたり  
まていさ息もたたく粉の舞  
はなれ粉火火を言わぬも洞か  
費の粉のうまをうまやむ舞か  
家通く粉のまの度かぬ水  
と川を流りして下る粉もか  
東や粉まのれたる魚屋  
まやりし粉のまのれたる魚屋

子威  
今見  
春思  
古竹  
柳飛  
院  
系  
莫  
是  
人

粉の膚に魚よりまらねんさか  
粉の粉に粉通なり丸目をか  
まらぬ水のれにまらぬ粉もか  
粉の歌の能てまらぬ粉もか  
粉の粉に流るるまらぬ粉もか  
一たふまらぬ粉もか  
舞はれまらぬ粉もか  
まらぬ粉もか  
うの川交の原をまらぬ粉もか  
まらぬ粉もか  
まらぬ粉もか

花縣  
拱亡  
柿  
人  
士  
又  
保  
代  
人  
人

願叢長

〇元



のたうらや大あらしと浪とや  
きちる千粒うにうらる松の乳  
うきみのおれ火とけり日夜か  
皇州 魂に足もくく大 吟  
うきみのやいづれをえても人の親  
うのたまうひのうもれちりふ夜鬼  
なまききうれは水にはかきね  
いの井も人めらうらうあか  
括うれ咽忘れ平粒の人  
と風平是坐してえらうれ 海  
さけいさけりやうらうら法の書

一草  
乙一  
五七  
年入  
一研  
外六  
一研

所 妹

風引 見とてた火の影砂か  
打の世と舟に食とふう何か  
下直とくも打うし 息かきう何か  
う舟りぬ六条の川 辺か  
長松ものりりりりれうあか  
鏡の明もはむうあか  
成さうれ使さく人にかれう  
杖子に揺わちてみるう何か  
うきみの子やうらうの所らん  
よまかりて筆のりりうあか  
ま子あつそのそんくねち粉か

公  
真  
芝壁  
松中  
少女  
一茶  
秀子  
有斐  
兩隣  
吐風  
秀右

題 叢 爰





干 履  
小 録

ほろりしてて獵矢をそくく小流か  
葦の灯火大串ふき草一葉か  
よる麻十葉そそ中のみを  
中串足て中抱らん松の影  
友心の中串ハ悔の身燭か  
松火をたらしそ人うらるる  
おのれ入心の突りも中串ハ  
ほろりそよよのそを懐心人  
干しそや又そゆくる破の泉  
又風や吹そらんれ小録  
又そハ調にそらん小録

白 雉  
保 吉  
班 象  
午 人  
屠 猪  
養 机  
嘴 笛  
林 風  
忠 交  
薙 左  
会

海 老 崩  
有 名 日

録や道石うら荒人の才  
又録のありそ新の崖か  
そそそりてそらんらん中串の口  
ありそしのりより中杖とゆそれ  
是そ大りん巨れらん子猿丸  
是それらんも持ておれ持丸  
そり木にふそく又りそ丸  
そらん十粒りらん又りそ丸  
又りそ丸中杖んきらんそらん  
身燭して廊下さる中又りそ丸  
又りそ丸そそそらんらん

英 松  
身 徳  
持 剛  
玉 芥  
車 童  
小 地 人  
梅 阿  
一 席 人  
柳 飛  
荖 木  
会

題 兼 長



起卧の心先たり又りし  
又りし中ととてりきくえう  
又りし大木のやまもつりたり  
兼古の牙ハ老たつ又りし  
まゝつて中れに友の極り  
又りし大木をたれのみもたの  
又りし大木つりしとて又りし  
まゝつととよれちりし又りし  
春られ又りし中てまた春  
又りし白をつりし悔りし小  
又りし中と中の中はけりし

史左  
書感  
沙花  
成員  
今  
完来  
年心  
可起  
今  
不寒

又りしと折の心とてめ  
又りし心とて松を植  
又りしと膝にりぬうつ  
又りし中と老尼の  
又りし大木をりし  
又りし白の毛髪をりし  
又りし中と老のうらや  
第ハ木にりしとて  
中りしと人よりられぬ  
又りしと大木をりしと  
まゝつと白をりし

月  
今  
道亮  
今  
乙二  
春丸  
岳路  
羨  
一子  
申  
勇



梅雨

案の戸やみりるるをよす大根  
 ありもやまのしん水のんりら  
 若く降りしりりみりる  
 池のまきもるるるりねみりる  
 入りもや位果ぬ身をそり大庭  
 入柄大いそ鼻通さるつ状か  
 美大して身をかきれたるつりか  
 枚帯のたぬく赤ま入柄か  
 とうとして入柄にせし雲徒水  
 梅るん徒も直に足ゆる  
 梅も養くま川梅ひくつ梅り

吉貞  
 岐東  
 碩高  
 力哉  
 左弁  
 白梅  
 公  
 保吉  
 祐昌  
 足直  
 道亮

梅白晴

くるまて入柄よりら尻刺の松  
 ありたるを雀さうり入柄れを  
 入柄晴平襪つをぬつさき  
 大船を見にゆる入柄大よりか  
 老運もそれよりさぬみりる  
 人のり道はあるくみりる  
 入り言涼しうたりるの冷  
 おうくと居共のさりみりる  
 入り居さうりとうけるゆか  
 門口にひりて来さりみりる  
 心あをを見そめ晴りみりる

号亮  
 権剛  
 寛左  
 了然  
 乃亮  
 砂壘  
 金堤  
 阿量  
 我少  
 双馬  
 鳴権

題兼夏



短 虎  
角  
角

又りもにひのりもりし席もる  
短ややしも骨折心の敷  
短やや芒生そ一垣のれま  
短やや毛虫の上にもる  
力ハハりたは短やとあつり  
短やや並市城の上にもるし  
短やや伽羅の白の狗ふれ  
あつりもり短やあれもり枕  
二りりたも短やのうつりもり  
短やや隣一の意にたのつて  
短やや周をにたつる意のあ

葛右  
分解  
甚お  
合  
曉基  
白権  
几菴  
保吉  
覆城  
州江  
士地

題葉夏

麻の瓦に短やのりもりもり  
短やや火のれりれおおりし  
短やのりもりを持のりもり花  
短やや人に及りり解の穴  
き里の短やあつりもりしりれ  
きり短のあつりもりもり作の瓦  
短やをたつりもりや牡丹花の上  
短や大はるりもりもり端のりれ  
短や大はるりもりもり端のりれ  
短や大はるりもりもり端のりれ  
短や大はるりもりもり端のりれ

長  
可親里  
飛員  
完乗  
不零  
る折  
乙二  
合  
月化  
月居  
末葉

儂いれ出ても短き取次ぐれ  
 短取といふつゝさぬ心の様  
 是に又短き取や考つて  
 けのしや取の短きもあいら  
 短取ん年の風塵まじり  
 短取れ春を去り暮らるる  
 短取のまじりまじり  
 短取とり人むにのまじり  
 短取や春を去り暮らるる  
 短取は短きよりまじり  
 短取は短きよりまじり

申高  
 美郷  
 武陵  
 袁了  
 一葉  
 旦菰  
 清光  
 美教  
 十年  
 其外

明安友

題藁

短取をば使ひて共る松をわ  
 止ぬのわりのやうに短取のそ  
 短取うらた取も短取とヤク  
 短取を提てまじり花の字  
 短取にうらた取の有り  
 短取れまじりまじり  
 短取や春を去り暮らるる  
 短取や春を去り暮らるる  
 短取を去り暮らるる  
 短取を去り暮らるる

車両  
 葉丈  
 久賦  
 香風  
 梅所  
 可考  
 岐山  
 荅木  
 几葉

夏夜

明き夜と位児の痛りれ  
 跡を伴ふ夜と隣りに明き  
 明き夜は乃も人死にさすの  
 明き夜はとりし舟の洞か  
 明き夜はすや乙子の歌ととも  
 明き夜と位児の痛りれ  
 明き夜はとりし舟の洞か  
 明き夜はすや乙子の歌ととも  
 明き夜と位児の痛りれ  
 明き夜はとりし舟の洞か  
 明き夜はすや乙子の歌ととも

白旋  
 如毛  
 去郷  
 号笠  
 幽嘯  
 星傳  
 梅尖  
 其夫  
 白踏  
 薨左

夏夜

夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜  
 夏夜の涼しき夜に起るや夏夜

五丸  
 返丸  
 士丸  
 有丸  
 祐丸  
 栄丸  
 朱丸  
 葛丸  
 葵丸  
 栞丸  
 長丸

夏  
力

夏の夜や二朝して見るそは花  
夏の花やとりつるね甚か  
夏の花やもあつるにりれ出  
夏の花と藤来りたる藤と  
夏の花はんにやのむらさし  
川にひらいて流るは流る夏の日  
夏にまゝの牛に添たり夏の日  
夏にまゝの市の手の夏の日  
夏にまゝの兵船や夏の日  
夏にまゝの里人か夏の日  
夏にまゝの海に流る夏の日

一葉  
寛松  
瑞了  
玄陸  
宇良  
樗良  
寛左  
公  
公  
公  
公  
向悦

夏  
力

夏の花や二朝して見るそは花  
夏の花やとりつるね甚か  
夏の花やもあつるにりれ出  
夏の花と藤来りたる藤と  
夏の花はんにやのむらさし  
川にひらいて流るは流る夏の日  
夏にまゝの牛に添たり夏の日  
夏にまゝの市の手の夏の日  
夏にまゝの兵船や夏の日  
夏にまゝの里人か夏の日  
夏にまゝの海に流る夏の日

公  
公  
公  
公  
公  
保吉  
保吉  
斗入  
公  
大に丸  
又丸  
士丸  
恒丸  
張六



出らよりすうこすて交の目  
 持書之二夜くれこすの目  
 凌雪んくうてぬぬ交の目  
 ついて来て赤回のとの交の目  
 交の目つやま八波る葉子さうり  
 ま心れの存りともさうり交の目  
 表子のやんかんえん交の目  
 交の目松より出ぬを平交ぬ  
 交の目いつもまじと打ひさうり  
 さんやうと廻子さうり交の目  
 小車の巻おさうり交の目

羨う  
 蕙白  
 竹老  
 電権  
 号笠  
 長高  
 其是  
 核是  
 幽啼  
 三原人  
 少也

白に別て新にれさうり交の目  
 表きて八波るもむつて交の目  
 蔓草くまれ遠もれ交の目  
 陰をた去ぬすて交の目  
 ぬく存れ井筒にすて交の目  
 松すし一あくの力たけり  
 小屏風の窓をそ心表の交の目  
 交の目柳 せんさうかぬさうり  
 表きて八波るもむつて交の目  
 竹の毛のぬさすてんを交の目  
 情さうり交の目負下地訓以

羨う  
 蕙白  
 竹老  
 電権  
 号笠  
 長高  
 其是  
 核是  
 幽啼  
 三原人  
 少也

歌

帳

友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...

又  
 泰  
 伊互 皆 己  
 其 女  
 其 夕  
 左 第  
 会 章 左  
 会 章 右  
 会 白 梅  
 保 若

友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...  
 友の如く...

心 非  
 介 培  
 梅 園  
 螺 寺  
 有 器  
 未 差  
 調 里  
 鬼 仙  
 茶 汁  
 今 奈 瓜  
 友 若 瓜

老よりれ伸すは是も改むの事  
 たしと云れ百のし入る枕改む  
 ことりま此幅を這ゆる日原か  
 探てたれふににたより幅の内  
 物息も久息も来と幅の内  
 改むの目けまのふんねま  
 目改むに墨てそろりと出にそり  
 引よまそ松まきしり幅の内  
 へたれふのまらりし幅の内  
 原そり改むもこの深さわ  
 幅の内まきまきしり幅の内

春 江  
 老 白  
 祐 号  
 順 丸  
 肩 山  
 長 翠  
 樽 光  
 今  
 夫 左  
 完 朱  
 午 人

人の才も藤にすむ虫や幅の内  
 う下つらわうと平ま木の久ろま  
 けり枕の清れはう平の白れか  
 とこのりのたよりうと改むか  
 何芽生や改むつらまびつらま  
 此の平やうとまきまき改むか  
 幅の内は田畑をた見ゆる

月 光  
 月 光  
 岳 路  
 梅 便  
 号 老  
 半 部  
 幽 晴  
 秀 剛  
 三 人  
 敬 英



紙

帳

晴つてはなをりもやしとの家  
ふるもせせりもあつり晴の風  
かもしもひつたにせりも晴の  
ますれてまふにまふりも原か  
酔ふりも晴のくまふりとの狂  
まふくと晴のまふりも原か  
か下たれてまふりも原のまふり  
釣初て這入て見たり晴の才  
葉平のちてまふりも原か  
か奔りも原かまふりも原か  
か原りも原かまふりも原か

文角  
菱左  
林方  
五縁  
古老  
桃舟  
子化  
塗水  
菱左  
今  
五九

帷

子

帷子にひきまふりも原か  
松凡のひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か  
帷子にひきまふりも原か

其父  
好  
家  
世  
乙二  
今  
真  
奇劇

照重長

計 花  
交 取 藏

との女も情子すゝの口十しり  
情子の月夜洲ま嫁入か  
情子にふしの白の志ききま  
情子にききく年の夜凡か  
情子や帆の夕凡を衣杉ま  
情子を意てむるより大現  
情子にぬ情子すし親の致  
情子や姉にかたるおと娘  
情子に投麻子まのふや過る  
情子に子や路過たるけり  
情子にふれりてふれりてふれり

道亮  
復物  
星漢  
雅啄  
秋凡  
惟平  
陸実  
芳高  
平馬  
不知悲  
年人  
几童

房 物

晒 布

古竹もそけりゆし交取折  
川越にまけん命ひ人平の  
藤秋にふれて情し交  
情の月十世の人美れの交  
神禱の美堂に情し白猫  
晒布にまきやすしまきまき男  
まきりまきまきりて晒  
まきりて晒布捲く晒  
まきりて晒布捲く晒  
まきりて晒布捲く晒  
まきりて晒布捲く晒  
まきりて晒布捲く晒

完来  
芙蓉  
風角  
又明  
長月  
白麻  
秋雀  
暮左  
標半  
復物  
左足

題 叢 皮



水之力

水

六月を死す事もわづらひたり  
 六月に水逝し来り是せむ  
 六月に海に去る水のゆる  
 六月に力や底根うきふに身懸  
 六月に力や木の煙うきの底  
 何れにたぐんも六月に松の風  
 六月に力や入と出との月ありき  
 六月に力や木の煙うきの底  
 六月に力や底根うきふに身懸  
 六月に力や木の煙うきの底  
 六月に力や入と出との月ありき

三浦人  
 春感  
 勝龍  
 陶子  
 他力  
 榮流  
 一字  
 右桂  
 桂丸  
 俊甚  
 人

氷餅

氷餅を白く氷餅の糖の丸  
 世の貴多き中氷餅のころも  
 のつとり氷餅をうきふ氷餅を  
 氷餅の貴多き中氷餅の糖の丸  
 氷餅をうきふ氷餅の糖の丸  
 氷餅をうきふ氷餅の糖の丸  
 氷餅をうきふ氷餅の糖の丸  
 氷餅をうきふ氷餅の糖の丸  
 氷餅をうきふ氷餅の糖の丸  
 氷餅をうきふ氷餅の糖の丸

周上  
 白粒  
 牛人  
 吉牛  
 道老  
 白雁  
 可亮  
 老翁  
 保吉  
 南陽

不夜酒

祇園云

一日の見ゆるものたきん歩 併  
不夜酒は等々のそのつ 時  
松見とて若もあらん不夜酒  
力降しや人を起さるつら  
祇園云や美音の原も凡葉の  
岸いその見くすといく降の児  
赤子よそのいふれに降の児  
舟より此岸に見らん降の児  
祇園云や人のみ歩し自云  
祇園云や人のみ歩し自云  
祇園云や人のみ歩し自云

竺高  
道亮  
東山  
院甚  
空市  
几董  
大江丸  
芸蟻  
一子  
道亮  
尺丈

嘉定

笠頭納涼

富士訪

新とて祇園を歩しむい訪か  
西瓜より口より祇園の入りか  
有燈の燈馬よりや祇園の云  
十六訪宛差一や嘉定吟  
子母訪といをいれは丸嘉定吟  
川よりをささるや地取のすい水  
膝すそてつらとすし地取連  
十しりや翠赤なる地取連  
月見のたきれすそそ不夜酒  
鏡之心も水打れや不夜訪  
きれいんらるへし訪

鷹角  
鷹赤  
鷹右  
護物  
他力  
道亮  
美沙文  
風水  
菅束  
鹿束

題叢夏

蝶の糸を教も入る花も入る

蝶糸

鞍馬代

鞍馬代や雲の夜明を道にても

鞍馬

と腕子や鞍馬代をさるゝ鳥の

道

半夏生

半夏生に逢逢の足ぬれす夏生

半夏

而中々森たるゝ鳥もさ夏生

宇橋

土用

土用や土用の入を鳴るゝ鳥

保

つれづれも落つゝさう土用入

一草

さうさうさうさうさうさうさう

道

さうさうさうさうさうさうさう

且

虫干

虫干や世にあらゝ人の暑さ

宗瑞

母人の振袖足たりと干す

宗瑞

揚の若さげはさうさうさうさう

虫干やうつら足はさうさうさう

周

虫干や夏のぬ折さうさうさう

凡律

虫干や世にあらゝ人の暑さ

夏

虫干や草にあらゝ草にあらゝ

百

虫干や産や他のもあそと干す

月

虫干のりもあそと干す

一

虫干のりもあそと干す

式

虫干のりもあそと干す

葉

虫干のりもあそと干す

手

虫干のりもあそと干す

蝶

虫干のりもあそと干す

草

暑

夏

日

題 暑

大は画に丹のさなる黒か  
いと口の乱て黒きさる元か  
りたおの字を黒きさる元か  
り脚りの元心紙さつさる元  
端みりて黒字を遊る黒か  
つ黒り一とんさる元皮  
松たさる元落て地にたつ黒か  
黒りや目をぬれさる市の響  
ふたさる元又黒きさる元  
黒りやより集たる元  
黒りや小庭の松に遊る元

弘臣 保吉 松与 士郎 白旋 曉基 公

大塚の黒をさる元  
黒りや折り一井山黒の砂  
黒りや人の肩を二本さる  
火を焚て黒さる元つひさる元  
黒りやと押さる元基のさる  
配搭に女の多さる元  
さる元と人さる元  
つひと人さる元  
黒りやさる元  
黒りやさる元  
黒りやさる元  
黒りやさる元

公 松 木 憐 朱 完 希 瓦 瓦 全 志 孫

題 遺 夏

暑りや立寄る法もうさしの本  
唯匠人々の名は暑りや  
暑りや眼を休むる暑りや  
日暮もくもくもく暑りや  
暑りやあつちつ暑りや  
柳もユキユキ暑りや  
むつしや暑りや人の衣に  
暑りや煮つきの汁に  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや

平角 瑞子 白塘 卓池 綾咏 史千 白鳥 求古 求古 求古 求古

日 天

暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや  
暑りや火桶足る暑りや

平角 瑞子 白塘 卓池 綾咏 史千 白鳥 求古 求古 求古 求古

題書夏



夕 立

夕立にききとて白く遊りぬ  
 夕立に打ん切たる世の中  
 夕立や只一折しにせよ此灰  
 夕立や瓦ももゆる人さし  
 夕立や門限取の人もさし  
 夕立や草をまつむ村。雀  
 夕立や流出たるむら  
 白白にその身ふ白くありりり  
 芥子の青帯の里ハリ夕立に  
 夕立や夕立かりてまをうら  
 夕立のききとれぬ心あか

三守人  
 夕立  
 白  
 百  
 曉  
 村  
 会  
 白  
 保  
 九  
 会  
 夕

夕立や世ハ是よりもしりし  
 夕立や雀お人さむ竹の中  
 夕立や松の木の松拍  
 夕立や折て火を焚穀の飛  
 夕立や世ハ是よりもしりし  
 夕立やまきまにまきま何系凡  
 夕立や志つたおりり後さし  
 夕立や二夜に日暮る時の松  
 夕立のふりも屋さん子の身  
 夕立の岸の前そいさう  
 夕立の身とらくと夜の咲

梅人  
 松  
 雀  
 士  
 米  
 可  
 屠  
 一  
 長  
 道  
 岳

又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年

乙二  
 志望  
 養子  
 武陵  
 奈岡  
 雲龍  
 一葉  
 愚庸  
 水枝  
 藤史  
 一葉

又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年  
 又立の年 又立の年

金也  
 招兵  
 師也  
 百沙  
 三及  
 虎睦  
 左舟  
 長心  
 一醒  
 雲華  
 左舟

及 雨

及 龍

題葉表

早

雨

雲 峯

負板のち故もふる民びたりわ  
 と天六九民のやまのには是よりし  
 百乞に是るまゝのるゝのわ  
 百乞やちや久多たこほれ松  
 ぬはちるまのすまひしき  
 其の峯跡に小笠の吹籠し  
 見てもく松さるとん其の峯  
 坐る座とつらりありや  
 百とれる急い若しな其の峯  
 其の峯白おまうそのほしめ  
 其の峯白おまうそのほしめ

益 杓  
 標 允  
 益 杓  
 高 三  
 曉 甚  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今

題叢長

鹿春の穂にあらるれて  
 下りてき獨流のままや  
 其れまに取らるれて  
 又とてきまにのり  
 其れまに松子まらぬ  
 其の峯裏りてり  
 藤汁のどは  
 其の峯りハ西へり  
 松の葉ハぬりも  
 其れまに松子まらぬ

保 左  
 只 明  
 牛 入  
 士 政  
 長 翠  
 朱 員  
 完 朱  
 三 顧  
 丘 子  
 一 身

う麻子ののりあり名を寄  
其の舞大倉前に入つ  
有明ハキヤとく入るの冨  
醉の眼のまにひの流や寄  
吹さくく芦を根うして寄  
とつりくろひ流にるるや寄  
寄舞城のくしるを塞がり  
たむ木くみ尺にるるや寄  
寄舞入りとたむ凡情水  
寄舞ひの付花に寄り

道亮  
人  
武陵  
身源  
寄  
瓜  
凡  
寄人  
兼也  
寄院  
寄

扇

白乞のありす存ひより寄  
寄舞船くすれハ寄の寄  
寄春れおれハ必寄の寄  
寄舞の寄舞ハ寄と寄り  
寄看て字難位替て寄舞  
寄の寄ふ寄大寄の寄水  
流来て接子に寄る寄水  
とつりへ要れ寄る寄水  
寄の寄る上に寄見寄る  
寄流込入寄あれる寄水

寄  
和  
古  
夏  
政  
李  
甚  
几  
会  
向  
表

題義長

碑記して牛の角うろぬか  
芦刈のそしてとるぬか  
交せりぬかもし使ふぬ  
多れて打のせとるぬか  
人のぬかしく打ふ折もあり  
常しとらしてかきとるぬか  
夕暮のぬかつとるぬか  
白巻してとるぬか  
なれおて候ぬか  
かの丸のぬか  
世えりぬか

保吉  
希言  
米  
実  
米  
下  
毫  
毫  
大  
身

園  
庭

り  
け  
心  
朝  
さ  
極  
む  
め  
う

六  
毫  
毫  
尺  
凡

題叢表

一に二度と人の心はハナレ  
白雲有隣の義之にこれ多  
況引のうらつらや死地  
先ゆれ八骨もたさく混うら  
光珠うらつら鳴るり古うら  
ののちもたやうれやうら  
うらつら人の心はわらう  
混うらつら破うらつらや  
うらつら板の敷に入れり  
森をうらつらつらつらつら

美葉  
大江丸  
重原  
八明  
士位  
ノ思  
朱英  
兄直  
半兎  
送亮

評評

裁裁

うらつらつらつらつらつら  
打出て見ても沸きうらつら  
のせて見てもあつらつら  
梳人に深きうらつらつら  
謎うらつらつらつらつら  
海心とつらつらつらつら  
汗のふきふきにけり  
玉筆の周りをあつらつら  
うらつらつらつらつら  
うらつらつらつらつら  
うらつらつらつらつら

一茶  
堀前  
岳路  
儿秋  
茅丸  
吳天  
一茶  
送亮  
送亮  
乙二

題裁夏

日 傘

雲りの人きつしき掛るか  
拭きやそれ中にも所はの  
障子の六松の古木やり傘  
弓よりれ帯の細さたるむろ  
傘海志るむろをきりり  
傘うしろ六力れおれりり  
柄に入れて三時よりと  
夏よりて傘に風さるむろ  
とと涼風をききれ  
傘 月をききれりり  
乙帳の裏もろ

赤秋  
白梅  
保言  
入心  
去端  
午人  
道夫

巾 婦人

葉にさしむくしきの  
多洲 老木の木のうら  
道中や白拭けし巾婦人  
まがたり 打ひそめり巾婦人  
け表と裏ハリと名う巾婦人  
表と世もけられは巾婦人  
衣襟の心をぬけ巾婦人  
ぬるや産をいふ巾婦人  
号と産の産をいふ巾婦人  
宇治殿の足投り巾婦人  
人素しと情に産をいふ巾婦人

以行  
松江  
几董  
兼左  
今  
朱良  
可助里  
人  
三府人  
兼左  
夫左

題兼夏

抱 筭  
枕 筭

抱筭や夜明て見れは花  
 吹ぬけて打つるの筭 枕  
 筭 枕 買ししと云て夢人  
 ちけよめるはに森をや筭 枕  
 枯竹のふかに對して見すし  
 すしとや夜仕舞なる井の帯  
 十凡や家になくともおきて  
 すしとやもぬりりいとてりか  
 作すしと古人ひもつるふあり  
 すしとやに繡とらう半の帯  
 十しとや帯とさるるの帯

海 笠  
 又 明  
 道 亮  
 夢 多  
 栗 更  
 菟 左  
 樗 左  
 成 甚  
 人 旋  
 夢 亦

涼

かた

二三町ありんてりすすし  
 すしとや花衣の鹿の秋の子  
 すしとや夢まもるは是も是  
 すしとや木を動して吹物  
 村のや鶯の危ふもすすし  
 すしとやを余して人の森を  
 人のの並てすしき幾くは  
 すしとや死ぬ枕を古き一 枕  
 すしとや片よりく喰ふ物の飯  
 すしとや見る方にふつ是の飛  
 すしとやとらむはさるる心

妙 言  
 几 菴  
 秋 瓜  
 成 甚  
 保 吉  
 跡 不  
 人 明  
 斗 入  
 梅 人  
 吉 川



十しよのまゝくゝる子孫か  
 十しよしをうれ切さる心の上  
 琴々来て十しよたり極の上  
 舟の公も見よ十しよや松の房  
 十しよや麻にたれたるまき道  
 十しよのなりに余る茶すか  
 十しよに嬉しは枕をたれり  
 十しよの田舎にんゆり夫婦か  
 十しよの人たりのハ梳人之  
 十しよやたれにんゆり老の良  
 十しよにんゆり余はゆへき

戸城  
 恒丸  
 士  
 会  
 若翁  
 樗牛  
 五  
 榮  
 為三  
 米  
 公

十しよや秋林ん丸に入  
 十しよや天の来よりハ田より  
 十しよや搔もたれぬ松丸磨  
 十しよや子多のまゝハ交のまの  
 十しよは人すしぬの流に多  
 十しよや下弦も知世も二人か  
 十しよをいれよたれりまの破  
 十しよのまゝもまゝぬ月夜か  
 十しよをゆられて十しよのた  
 十しよや流なつてまゝてり  
 十しよに退て目打く糸世か

戸城  
 会  
 不  
 定  
 月  
 道  
 会  
 無  
 平  
 玉  
 妻

此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の

漢物 正座人 具也 雪権 芦葺 玄植 戴冠 山 白考 小亦人 文角

此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の  
此は平木根絶に牛乳の

秦机 今 考 卷 一 系 系 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

秋のふれもすしき秋のぞ  
よふもすしきすしき秋人  
秋のなるもすしき秋人  
心凡のすしき人も来凡  
すしきやまのりも花のす  
小すしにすしき木城か  
すしきや老なる秋を早もす  
力すしに清も雪のつく川向に  
すしきや秋の上にと心  
す凡や泣も人もすしき  
ひる秋の秋はあはれ

春哉  
女さよ  
庭景  
美南  
典人  
白寺  
路丈  
瓦屋  
鏡  
陸奥  
崇石  
以波  
葉事

孤  
涼

題葉長

すしきと秋もすしき秋の  
秋もすしきすしき秋の  
すしきもすしき秋の  
木すしに清も雪のつく川向に  
すしきや秋の上にと心  
す凡や泣も人もすしき  
ひる秋の秋はあはれ

李天  
西川  
東在  
抱政  
汶里  
木老  
秀部  
孫榮  
孫考  
柳花  
子代

抜赤き魚釣に出ん夕す  
茅ののこエ支して見る涼水  
網歩の足らにかりり涼水  
血のつちかんをくすまこ水  
下すこ月影をく人木のま  
ゆしと中人をむ言飲の下す  
道の子て水の世をくすまこ  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
まれを拓くまじし心を涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼

曉  
夕  
暮  
暮  
至  
白  
也  
儿  
今  
保  
十

秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼  
秋ゆらに陽際も足る夕涼

梅  
大  
不  
成  
恒  
存  
士  
丈  
芳  
之  
二

力代のさしだるのやすきと  
前張のうらみもあつた  
人志のふちをまはり川  
の味も人の業の味に  
才のふれ鏡とて正つた  
たましくはなす心気と  
母ありとゆふのありつ  
たすき業の欠を揮を  
としちのゆかりり涼  
も凡にまのつらさを  
わすれぬ人の心

善哉  
如泥  
定雅  
可兼  
瓜  
月化  
木海  
寛松  
蕉百  
学堂  
百地

漢版のさしだるのやすきと  
発白する二丈もろく下涼  
をたぬを打たせて房の涼  
授子たぬさすりたすき  
百すて七生つりたすき  
あちちうら乳を来て乳つ  
鳴いたる業の味に  
すむ百たぬに  
ニッ子を七并に  
夜ホも子育すんで  
り年のちるれし秋に

護物  
身原  
葵子  
志宗  
兼也  
瓜棧  
因  
原更  
詠  
文略  
吾友

風 薫

庭 あり

折 氷

夏笠に石をのこつたり人涼  
 涼甚し日あつるを枕り風  
 麦葉の黄火をさすしつす  
 風薫るもこれ櫃か核り風  
 風よりるは葉の揺さるるの辺  
 橙の久るすまきや風よりる  
 風よりる多や鞠場は葉は終世  
 暖や多や見ゆれ風よりる  
 揺さるも涼しや門の月  
 管末どくもそをさすんたり  
 二人してたすの端は風あり

斗 困  
 雲 籠  
 寄 桂  
 保 吉  
 今  
 道 亮  
 乙 二  
 一 葉  
 金 花  
 五 木

石工の藝を吟んたり  
 院のすむ敷は人見たり  
 心吹たゆをさす  
 撥多村の表を流るし  
 一寸の石をたりのり  
 八九万石をたるとり  
 立寄をたえて世付ハ  
 伝む人もその物にわ  
 竹ありと一本あり  
 味し平はあのをそ  
 立寄ハ物あり

公  
 鳥 醉  
 儿 董  
 公  
 百 四  
 左 四  
 涼 紙  
 薺 左  
 角 梳  
 石 燕  
 五 明

題 叢 夏

時めくや佳ふ花柳の小柄千  
学は花を愛をちりけしうわ  
字ふあふちるあふしうわ  
凡やくと因れきしと過しうわ  
石を押し以夜の寝おや道しう  
字はたに厚くしあつりのしうわ  
人も誠は来凡しうわ花を愛  
半抱てつら得したうしうわ  
表法に氣合わくしうわ  
佳ふと心氣足てさねわねわ  
新しうと来にさふふしうわ

恒 凡  
士 吟  
栲 堂  
榮 兆  
完 來  
年 人  
吉 牛  
尺 天  
長 高  
善 高  
栲 堂

田 井

花を愛をちりけしうわ  
君の代の心のけりさしうわ  
は佳ふ酒さうはともあひれり  
半のりハ多ね者され下しうわ  
松凡さうにさふしうわ  
凡さうとさうりする佳ふわ  
そととれハあつりしうわ  
柳の花のちる佳ふ道しうわ  
人々の枕て古さしうわ  
勢もも子れさうしうわ

萬 和  
優 之  
久 威  
未 介  
小 尼  
柳 堂  
榮 堂

題 兼 夏

晒 井  
 水の中けるしるは其はゆがの田の月夜  
 むすまもむま良をきましらわ  
 松の木は海先道の岸のしるわ  
 ろのしるわ沈む松木の石にうれ  
 物のおの胸しるわをしるわ  
 云良の岸き人の院さる  
 白きやしらのをけむりぬ  
 晒井やせしつるきをのき  
 晒井やせしつるきをのき  
 晒井やせしつるきをのき  
 晒井やせしつるきをのき  
 晒井やせしつるきをのき  
 晒井やせしつるきをのき

葉 尺  
 葉 双鳥  
 葉 寬兆  
 葉 方壺  
 葉 桃柯  
 葉 左券  
 葉 百吹  
 葉 薨左  
 葉 寸車  
 葉 故授

心 左 麻地河  
 心 左 心左よりしるは河之三寸土  
 心 左 心左河へけをハ遊くハ  
 心 左 心左河中に葉に葉しるは心左  
 心 左 心左井や小魚と持し心左  
 心 左 心左浴衣はハ心左心左  
 心 左 心左心左心左心左心左  
 心 左 心左心左心左心左心左  
 心 左 心左心左心左心左心左  
 心 左 心左心左心左心左心左

心 左 葉 一 掘  
 心 左 葉 吐月  
 心 左 葉 長高  
 心 左 葉 一葉  
 心 左 葉 寬松  
 心 左 葉 米年  
 心 左 葉 善記  
 心 左 葉 凡董  
 心 左 葉 葉抄  
 心 左 葉 瓜

水  
 水

題 葉 夏



吟 瓜

世譽ての心着るものよりか  
昔よりや菜碗よりつるの上  
ありきを枕下瓜の切るまで  
ひふれ口に是や平し瓜  
人來るら陸にまれば平し瓜  
昨よりくも一時的や平し瓜  
柳ありはさるる瓜人道明寺  
吟汁や餅にたよるるの舞  
瓜大粉のまふれそあま大芥  
瓜飯に炊けしはま平し瓜  
瓜飯に炊けしはま平し瓜

慶 李 投  
車 蓋  
盧 風  
一 菜  
琴 二  
米 黄  
箕 十  
景 心  
櫻 凡

吟 物  
梅 干 飯  
青 需 散  
燕 極  
漆 飯  
批 杞  
揚 梅  
李

瓜飯や平し瓜の  
差控てりてや平し瓜の  
干飯や花さや粉の書  
梅干や梅干片して一盃  
白くも燕にや平し瓜  
豆極の中にも印白ハリ丸  
木の房くろ光る眼しや平し瓜  
有世いたくもくも平し瓜の木  
むついでいも平し瓜の批  
やすりに壺くも平し瓜  
赤く丸の赤い李をなく小

米 壳  
推 已  
籬 又  
道 亮  
瓜  
核 半  
芳 角  
瓜 疏  
一 菜

題 表 夏

林檎  
百日

菱柳

鬼下の鬼に喰らすすくは  
不くとしおにうしんこ  
とれハ愛し〜して百日  
咲きさるふにむに〜り  
とる子入り秋にふのうら  
六月をさうし〜り百日  
碧池蓮花影の標や百日  
百日取らさるも咲ハあるし  
二日月のはし〜り百日  
善哉〜り百日  
園〜り百日

鶴光  
朱英  
女子代  
百日  
不  
恒丸  
先末  
菱字  
秋史  
鼠兆  
百日

菱花  
菱花

菱柳

葱

葱

何

骨

菱柳のち明さるる白灰ハ  
生柳に火のわら前編所々  
り〜り秋風ら〜り百日  
骨も小町も老る菱花  
菱花の心も〜り  
菱花を〜り柳や凡の  
菱花に秋の〜り風見  
菱花の〜り〜り  
骨の〜り〜り  
何骨の〜り〜り

白枕  
丈左  
菱花  
白枕  
朱英  
道彦  
恒丸  
完末  
都雀  
柳起  
吐力

題菱夏

夏花

何身や凡紅をまゝる船の  
舟蓮下扱了り白くさりて

柏翠  
去亮  
津屋  
鏡嘸

蕪菜

白ややむけはあつちりひのふ  
むけはあつちりひのふ

其爪  
不明  
燐酸

海松

多産に凡見る海松のそよふ  
ひしひしあは蘭のふを替り

出晴  
尼菜  
凡

蘭

蘭のふや植釣子のふれ  
蘭のふのそよふ白の末く凡

李東  
出晴

夏花  
夏子やとてそよふは花

夏子に様々の花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子やとてそよふは花

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏子に花をまゝる花をまゝる

夏花

保若  
砂石  
士郎  
糖末  
星布  
素劇  
寛松  
北元  
秋史  
帰春

芒 芒すしき言の存のり

乙二 東野

思 思のふらり心無むか

白糖 送亮

剪 剪す花

白糖

釣 釣す子

白糖

彎 彎すや中うろ一ね立てり

子母

凡 凡葉の自ひすむさの先

三人

凡 凡葉やあらし呉子むい又差

号老

凡 凡葉の吸うしりり松の香

後駕

玉 玉す

三位

鴨 鴨す子 鴨のた村白の皮すふ巻

とら

葎 花 花より花をすくふはハき花

道老

射 射す 射すハウすし籍子のくすしハ

碁山

蕨 蕨す 蕨すは印はもさるむ志すの汁

吾仲

鬼 鬼す 鬼すはうすくこの蕨もすすすり

力化

赤 赤す 赤すはくすりにすすうあのみ

吐月

麻 麻す 麻すはくすりにすすうあのみ

夜草

芥 芥す 芥すはくすりにすすうあのみ

曉甚

題葉夏



夏  
 報子花  
 為吟や素の心くさ遠くして  
 昔の心をくさ秋て居の心  
 多れ行く秋をくさ秋て昔の心  
 昔の心構あたる木陰や  
 為ふや入江の風の吹の岸  
 吹くくす風くさくさ昔の心  
 麦飯に交暮りの心現る風  
 不もくさ夏暮りの暮さくさ  
 報子心の登つさくさ夏の上  
 是夏上のり出さくさ秋の上  
 旅心やくさくさ秋の上

葉飛  
 暮三  
 奇閑  
 旅人  
 大只  
 琴松  
 恒丸  
 狭船  
 女子代  
 去武  
 奇抄

はる夏やゆづり吹て夏くさ  
 夏夏やまのふのふりに夏は  
 報子ふやゆれいらくと岸赤き  
 夏夏やとらふ秋も夏に夏は  
 旅心の花は肩くさくさ女は  
 夏夏やいさくさ夏の色に出る  
 夏夏や秋も海と守りくさくさ  
 夏夏や吹くさくさ秋の岸  
 夏夏やくさくさ秋の岸も夏は  
 夏夏やとらふ秋も夏に夏は

葉左  
 来上  
 白焼  
 也夏  
 不吹  
 感去  
 元  
 諸丸  
 存亞  
 豊川  
 恒丸  
 鷲踏

夏良に物の上角をぬき  
 夏良下親の心をいしらぬ  
 夏良にゆくまゝ人を松の陰  
 夏良や羊火焚き流しゆく  
 夏良はふて足らぬ八重巻  
 夏良よふゆいとまのけする  
 夏良の首にまゝいぬぬか  
 夏良やまもたのこし垣一色  
 夏良はねとまゝつむさか  
 夏良や家より老むるの  
 夏良やまゝ風をこし捕らぬ

又焼  
 きせ  
 白折  
 道彦  
 一学  
 奇剛  
 桂生  
 万和  
 素親  
 右焼  
 柳井

夏

夏良や万葉の松の嶺の上  
 夏良はまするふてまゝり多  
 夏良や松の心をいしらぬ  
 夏良や花にまゝ風をのけ  
 夏良のまゝにゆくまゝも  
 夏良に息吹くまゝ木陰か  
 夏良やまの弁をまゝおた  
 夏良のふゆまゝるまの中  
 夏良やまゝ帰して樽の壺  
 夏良や裸てあつた人の物  
 夏良のふゆまゝるま

共山  
 美雅  
 龍吟  
 野春  
 吾友  
 典略  
 松江  
 左井  
 多麻  
 公  
 曉甚

夕良のふとをれを大塊  
 夕良の指や門田の扇屋と  
 夕良の花をじ猶や余路ん  
 夕良や花に嵐の歩すし  
 夕良や心のこけを極くし  
 夕良や耳のこけを白りし  
 夕良もこれし心の舞あ  
 膝折けは夕良の歌を字と  
 夕良や指あつたけ割木能あ  
 夕良やそれ這きてあつた  
 夕良や今に白りて改めん

今 左  
 薔 右  
 百 明  
 白 燈  
 秦 馬  
 袋 志  
 瓜  
 東 里  
 松 後  
 大 丸  
 傳 号

夕良や細く前より一たん  
 夕良の花のあつたの料理か  
 夕良のよのこせ脈にまゝをこ  
 夕良より夕良出しをり伝  
 夕良や余心のをさる指先  
 夕良や味のよのけをよこ  
 夕良や雀の房をさるの中  
 夕良や浴をよこす戸一枚  
 夕良や夕良花にりりりり  
 夕良や夕良花にりりりり  
 夕良や夕良花にりりりり  
 夕良や夕良花にりりりり

存 正  
 誤 六  
 長 翠  
 木 僊  
 葉 兆  
 米 免  
 方 有  
 午 心  
 完 末  
 岳 結  
 松 号



巾しろう久良の喉戸に丸  
 久良や二布ろくも垣のまき  
 久良に産もえん日面  
 久良やうり位するきり  
 久良や荒末やを壇のき  
 久良の花は心かおれん  
 久良に伝えれたり香帽子折  
 久良や裸て立る世は女  
 久良やこゝか来たる井  
 久良の隣もあつ葉原小  
 久良や芳を垣人伝

長寸 梅史 家新 糸明 其菜 寛松 菱子  
 海川 岸末 汶里

青

瓢

久良の風は遠に  
 久良の癒て甲斐ある夜  
 むの花にうきうき  
 月影にうきうき

下弦

菱孝

紅

豆

新麦や昔より大村久垣  
 新麦や昔より大村久垣

上弦

一葉

新

麦

新麦や昔より大村久垣  
 新麦や昔より大村久垣

瓜

小

瓜のまに狐囃る自伝  
 瓜のまに狐囃る自伝

一葉

菱孝

白梅

天明



榮

火より古板ありしてありき  
 凡ら長くは葬りのともは火より古  
 多れやや金銀の物つちより古  
 櫛のやうとあるは火より古  
 又りや現に落る火より古  
 物家にはこれ程より火より古  
 万葉の軒の片や夏の古  
 雲と道より人や唐より花を  
 家より見送る雲は月を  
 雲は雲の心の世や又のり  
 雲は子石の石のり

号  
 奇剛  
 主迪  
 夢  
 潤  
 芝心  
 佐丸  
 院甚  
 葉右  
 百  
 市原

題叢夏

杉の乳は竹石の雲は  
 松凡に出て吹雪や雲は  
 碑一礎のふや雲は  
 雲よりて夏はのふは  
 上へりや雲は  
 雲は  
 海雲は  
 雲は  
 雲は  
 七尺の屏凡も  
 雲の

大江丸  
 順丸  
 尺文  
 米良  
 一葉  
 復物  
 曰人  
 梅價  
 宇伴  
 又柏  
 以兮

毛物 蛭

狐

魚

鹿指ふたはにけりしりし若の音  
 迹るもみかみそをきく其の鹿  
 狐の穴や黄州其の溜りも  
 枝の本迄はもすきやあまの川  
 昔してん休むハ物のはりりり  
 ひとしりん毛中よりつゝ海魚か  
 物多れ毛中落るる木下下  
 これ行くと程は枝の毛中  
 砂原や川のいそをたり毛中  
 松風や葉中のうら言ふ毛中  
 赫原原状魚のり素を毛中

共  
 如柳  
 窟来  
 何れ  
 園更  
 儿董  
 都雀  
 文左  
 一蕙  
 乙二

金龜虫

川

物

子むらや長者すぶのうらむ  
 蛇とれてうそてさり原中  
 蛇捲て糸のきこや蛇のうら  
 世の流に公るもんは尺測の蛇  
 つる蛇の揚中も力なうら  
 川物下條の狸は凡の條  
 川物や糸を引し糸の糸  
 川物や器も必竟世の糸  
 春もちかあはせめりる河  
 河物大はめりやむら木立  
 河物の原投込む草か

茂秋  
 若お  
 道亮  
 護物  
 不芝  
 自権  
 保若  
 大江凡  
 道亮  
 一葉  
 菅草

題兼夏

何れや柳ふもは故にさうり

月防 兼甚 二人

小 辨 結つて不知火をうね浪の上

珠美 白錦

海月取 贈を押しもあつてさうり

曉甚

仲 結 仲 結 五つをとりていささうり

兼甚

誰人の凱陣よりそ仲 結

村江

己の心は動きてさうり仲 結

白境

児者さうりの節もあつて

道亮

薬屋の座や薬の小豆さうり

長高

舟花じらむ勢いやあつて

一葉

乙松やさうり薬の赤さうり

辨 結 五つをとりていささうり

交米樂 裸身に非るなりあつて交米系

日折 使 異装の折目さうりさうり使

久藏 甚お 律大

あつてさうり使やあつて

弁お

あつてさうり使やあつて

標お

あつてさうり使やあつて

尊右

あつてさうり使やあつて

人

あつてさうり使やあつて

甚お

あつてさうり使やあつて

人

あつてさうり使やあつて

白境

あつてさうり使やあつて

保吉

題 兼甚

笹の葉に下りては枝のしづか  
 枝折してまや花毛の狭くれ  
 才にさか草をま折ては枝か  
 若ふ心道のゆゑのりは枝か  
 酒後もあすきては枝は枝は  
 涼し左のゆゑまよては枝の葉  
 枝枝とまほし人れ小の丸  
 枝枝とて月ひまのふ葉の葉  
 枝枝とて七又眼は枝巨は  
 灯籠のやうな葉は枝は枝か  
 光信の画にまよては枝は枝

松先  
 士強  
 今  
 芳之  
 米英  
 若之  
 若牛  
 乃亮  
 今  
 一葉  
 出嘴

川社 秋代

鴨のころは道は乾く夕  
 枝折してまよにまよ狭くれ  
 涼しまの嘘のいれぬは枝か  
 枝折して初まの吟人置るま  
 花吹雪をまよれりたは枝か  
 枝枝するまよるは枝は枝は  
 拍子に魚のりまよ川社  
 有底にあつ勢まよは枝  
 秋代や男女のまよまよ  
 秋代まよまよ吹雪まよ  
 花吹雪を先へ草花編か

唐果  
 石海  
 有斐  
 白泉  
 双龍  
 白尾  
 漫之  
 一葉  
 一葉  
 感之

題表良



交心や雲へし遊さそら  
 交心や斤平ゆたさる葉のつ  
 交心や馬の筋は回環さる  
 交心や灯籠提て下詠の雲  
 交心や女にあらそ松をー  
 交心や月ハ心のとをゆ々  
 交心や塚に遊る馬の子  
 まりれてりしを素よ交心か  
 牛子に一節ぬれる交心か  
 有徳にさるし云々の鐘子か  
 交心や弟と豆を居けり交心か

道彦  
 右旋  
 女几秋  
 皇  
 支流  
 雀香  
 松白  
 院甚  
 士位  
 恒丸  
 米貞

交川

燕も心は高き交心りれ  
 川にさるゆに月詠り交心か  
 物系も又あそもそ交心か  
 一奇の勢に流る交心か  
 交心や魚にさるる小塔吟  
 交心や塔にさるる多の塔  
 交心や燈の亮るさるるし  
 交心や末足てあるり交心か  
 交心や舟に入る大津さる  
 交心や夕日やしもさるる  
 交心や米炊てあるる大男

甘吾  
 先末  
 月夜  
 手馬  
 雲白  
 鶴踏  
 恒丸  
 尺笑  
 左角  
 江我  
 米陵

題兼夏



夏 海 交の海一海つての荒うれ

夏 交の海入也つたうつりり

夏 交の海入也つたうつりり

夏 交の海入也つたうつりり

夏 交の海入也つたうつりり

夏 交の海入也つたうつりり

秋 近 秋近きり旅のうらりり

秋 近 秋近きり旅のうらりり

秋 近 秋近きり旅のうらりり

秋 近 秋近きり旅のうらりり

秋 近 秋近きり旅のうらりり

漢 批 星

漢 玉 壺

漢 竹 六

漢 蓄 三

漢 海 陶

漢 芸 機

漢 嵐 六

漢 平 角

漢 護 物

漢 澆 平

漢 雨 考

晚

晴

晚

夏

夏

夏

夏

夏

夏

夏

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

夏 交果や馬のうらりり

漢 北 池

漢 保 吉

漢 恒 丸

漢 養 子

漢 大 江 丸

漢 可 劫 里

漢 樗 車

漢 米 英

漢 蓄 三

漢 蓄 牛

漢 道 亮

題 兼 夏

入直の辨しき文と云はれり  
 心標や古をたうし水又より  
 ちりりり文にすしち水并  
 何下や行とくくわ文の氣  
 文りや権を本院の料理のり  
 又多ハ文のいの心 教 為  
 村のハちとをこれと文ハ来り

瑞子  
 寛松  
 古卵  
 龍吟  
 確合  
 惟平  
 方解



